河南町文化財調査報告書　第10集

関ノ入遺跡・長者館跡

－須江山浄水場配水池建設（増設）工事に伴う事前調査－

平成12年３月

宮城県　河南町教育委員会
石巻地方広域水道企業団

関ノ入遺跡・長者館跡

－須江山浄水場配水池建設（増設）工事に伴う事前調査－

発　刊　の　辞

現在世界には約60億の人々と190箇国の国々があり,各々の地域に固有の文化を持つ人々の生活が営まれております。そして，交通手段の発達，政治経済の国際化等で60億の人達は有形無形に他国とのかかわりが益々深くなっています。他国とのかかわりを持つ時に最も大切なことは，相手の生活，習慣，文化等を理解することだといわれています。その為には同時に自国の文化や歴史を知り，誇りを持つことも重要であります。

その意味で現在，自国の文化，歴史を再認識したり，歴史上不明なところの調査研究が地味ではありますが，全国各地で着実に行われており，大きな成果をあげております。

平成12年２月には，埼玉県で50万年前に住んでいた原人の建物跡が発見されたとのニュースが報道されましたが，50万年前の原人は北京原人やジャワ原人だけだと教科書でならった私達からすると，大変な驚きであります。

この発見はおそらく，今後の日本各地の歴史に対する見方を大きく変えていくものと思われます。そのような中，河南町でも，奈良・平安時代の遺跡として知られる関ノ入遺跡，金売吉次の仮屋敷という言い伝えのある長者館跡の発掘調査を中野裕平，市川洋一両職員を中心に行ってきましたが，その結果，多少おくれましたがまとめることができたことは大変喜ばしいことであります。

須江山を中心とした一帯は，以前から焼き物の宝庫だということはよく知られていました。これまでに多くの須恵器や土師器が出土，殊に「佛」と書かれた土師器坏や仏具を模倣した土器など貴重な資料が発見されました。この度，関ノ入遺跡の調査では須恵器を作るための粘土を掘った跡や古代の畑跡等が確認され，長者館跡からは,915年に現在の青森県十和田湖のなりたちに係わる大噴火により火山灰がこの河南町一帯にまで降りそそいだ事実が判明しました。河南町の遺跡には，全国レベルに匹敵する宝ケ峯遺跡をはじめ，数多くの遺跡があり，今後更に遺跡の保存や調査研究に努めなければならないと思います。

今回の発掘調査のまとめが，わがふるさと河南町の歴史認識を更に深め，先人の営みにおもいをいたし，現在住んでいる私達にとって，河南町を愛する心の手助けにでもなれば幸甚であります。

平成12年３月

河南町教育委員会
教育長　齋　藤　龍　雄

例　　言

1．本書は，石巻地方広域水道企業団による配水池築造増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として，実施された調査の報告書である。

2．発掘調査は，次の要項で実施した。

〔遺　跡　名〕　関ノ入遺跡（遺跡番号：69041），長者館跡（遺跡番号：69022）

〔所　在　地〕　宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入 290番地

〔調査対象面積〕　6,800㎡（調査面積：約 3,900㎡）

〔調 査 期 間〕　平成９年７月７日～平成９年７月15日（確認調査）

平成９年７月16日～平成９年12月18日（事前調査）

〔調 査 主 体〕　河南町教育委員会

〔調　査　員〕　河南町教育委員会社会教育課　主査兼社会教育主事　中野裕平

同　　主事　市川洋一

3．調 査 指 導：　宮城県教育庁文化財保護課

4．発掘調査にあたり，次の方々から指導・協力をいただいた（敬称略）。

〔発 掘 調 査〕　宮城県教育庁文化財保護課：真山　悟，後藤秀一，村田晃一

矢本町教育委員会：佐藤敏幸（遺物整理も）

〔遺 物 整 理〕　石巻市教育委員会：芳賀英実，木暮　亮，阿部篤，古澤亜希子

石巻市議会：岡　道夫

㈱古環境研究所：早田　勉

5．調査・整理参加者：石川利江，市川敏子，伊藤とも子，伊藤ゆう子，加川恵子，川田久美子，

木村圭宏，後藤恵美，近野梓，鈴木よみ子，高橋義美，丹野幸子，中塩聖子，

三浦理恵，山田紘子，渡部一男

6．本書には，関ノ入遺跡と長者館跡の２遺跡の発掘調査成果が記されているが，遺構番号は便宜上関ノ入遺跡の遺構番号に統一した。

7．報告書作成にあたっては，次の者が作業を分担した。

〔遺 物 実 測〕　中野裕平

〔遺物トレース〕　伊藤とも子，川田久美子，丹野幸子

〔遺構トレース〕　伊藤とも子，川田久美子，丹野幸子

8．土層の色調表記については，『新版標準土色帖』10版（小山・竹原：1990.6，日本色研事業株式会社）に準拠し，土性区分は国際土壌学会法の基準を参考にした。

9．本書の執筆は，河南町教育委員会社会教育課主査兼社会教育主事　中野裕平と同主事　市川洋一が分担して担当し，編集は中野が担当した。

目　　次

発刊の辞

例　　言

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1

2．遺跡の歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査経過 …… 8

1．調査に至る経過 …… 8

2．調査の方法と経過 …… 9

Ⅲ．基本層序 …… 9

Ⅳ．検出された遺構と出土遺物 …… 12

1．竪穴住居跡 …… 12

2．粘土採掘坑跡 …… 15

3．溝状遺構 …… 17

4．小溝状遺構 …… 18

5．土壙 …… 21

6．焼土遺構 …… 27

7．その他 …… 28

Ⅴ．考察とまとめ …… 28

引用・参考文献 …… 32

付　　編 …… 35

写真図版 …… 38

報告書抄録 …… 51

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

関ノ入遺跡は，宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川・代官・山崎・しらさぎ台地内に，長者館跡は，宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入地内に所在し，ＪＲ石巻線佳景山(かけやま)駅の南方約６Kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33㎢，人口約18,211人(平成12年１月31日現在)の町で，宮城県の東部に位置し，石巻市の北西，矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川に合流し，町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60～90mの通称須江丘陵，西に箆岳丘陵からつづく標高70～170mの通称旭山丘陵,北に最高所173.9mの和渕山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり,江戸時代には農業用水確保のため広渕沼が造られたが，大正10年から昭和３年にかけて干拓されて水田地帯となっている。

須江丘陵は，小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。関ノ入遺跡は，丘陵南部のほぼ中央の頂部及びその周辺斜面に，長者館跡は，丘陵南部の北東の頂部に立地しており，頂部の標高は50～65mである。現況は宅地，工業用地，杉や雑木の山林で，他に僅かの畑地などがある。

本遺跡群の地層は,砂岩,黒色粘板岩,縞状頁岩,花崗岩質岩の礫からなる中新統:追戸層(佳景山礫岩部層)が基盤をなし，その上に砂岩とシルト岩の互層と細粒凝灰岩,礫岩を主体とし，中程に僅かに褐灰～灰黄褐色の粘土質シルト岩を挟む鮮新統：表沢層，その上には層の下部が粘土岩を挟んだ砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として，層の上部では淡灰～灰色を呈した陸成的な粘土質シルト岩が発達している鮮新統：俵庭層(仙台層群では大年寺層に対比させられる)，その上に部分的に厚さ１m前後の発達した斜層理などの段丘堆積物が見受けられる(滝沢・神戸ほか：1984.3)。

2．遺跡の歴史的環境

町内には，関ノ入遺跡及び長者館跡の所在する須江丘陵やその西に位置する旭山丘陵などの丘陵部を中心に，多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について，時代別にふれてみたい。

旧石器時代の遺跡は１箇所確認されている。それは関ノ入遺跡で，年代幅は４～９万年前と広いものの，同一層理面上の近接した位置からスクレイパー，剥片，二次加工のある剥片が各１点ずつ発見されている。(阿部・須田：1997.3)先端部が剥片の打撃点の延長線上から横にずれている「斜軸」と呼ばれる中期旧石器時代の特徴をもつものがあることから，確実にこの年代幅の中に収まってくるものと推定される。

縄文時代の遺跡は24箇所確認されている。この中で，型式名のわかる土器を出土しているのは12遺跡である。時期の古い遺跡から追っていくと，以下のようになる。

桑柄貝塚は,カキを主体とした鹹水産貝塚であり，前期(上川名Ⅱ式，大木１式)の遺物を包含する。(藤沼・小井川ほか：1989.3)。

関ノ入遺跡では，前期(大木２式)，中期(大木７ａ～８ｂ式)，後期の遺物が出土している(中野：1988.

3，中野・佐藤：1990.3，佐藤：1993.3)。

朝日貝塚は，ヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり，中期(大木７ｂ，８ａ，８ｂ式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：前掲)。

小崎遺跡からは，中期(大木８，９式)，後期，晩期の遺物が採集されている。

須江糠塚遺跡からは，中期(大木９式)の遺物が出土している(高橋・阿部：1987.3)。

宝ケ峯遺跡は，縄文時代後期の土器型式「宝ケ峯式」の標式遺跡として，学史的に有名である(伊東信雄：1957.3，松本彦七郎：1919.5，1919.9，志間・桑月1991.11)。ここでは中期，後期(南境式，宝ケ峯式，金剛寺式)，晩期(大洞Ｂ，ＢＣ，Ｃ１式)の土器が出土している。外に土偶，スタンプ状土製品，石器，石製品，骨角器など多数の遺物が出土している。また，遺跡の一部には，オオタニシなどからなる淡水産の貝塚がある(藤沼・小井川：前掲)。

前山Ｄ遺跡からは，中期(大木８式)，後期(南境式，宝ケ峯式，金剛寺式)，晩期(大洞Ｃ１式)の土器が出土している。外に土偶，土製品，石器，石製品が出土している。特に，使用痕跡のない石器，石器製作時に派生するチップの出土が顕著である。トゥールが少ない点も特徴である。また，多数のたたき石，未製品の石錘などもある。宝ケ峯遺跡の南東約250ｍに位置し，年代的にも重複することから，同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

代官山遺跡からは，後期(南境式)の遺物が出土している(佐藤：1993.3)。俵庭遺跡，大沢Ａ遺跡からも後期(南境式)の遺物が採集されている。

前山Ｃ遺跡からは，後期(南境式)，晩期の遺物が出土している。ここも宝ケ峯遺跡に近接しており，その関連が考えられる遺跡である。

太田沢遺跡からは，後期，晩期(大洞ＢＣ式)の遺物が出土している。沢合いの緩斜面をたどって頂部へ達すると宝ケ峯遺跡に至るため，ここも同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

外に前山Ａ遺跡・Ｂ遺跡，箱清水寺脇遺跡等があり，その多くは，旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入ったところに広がる平坦部や緩斜面に立地する。また，宝ケ峯遺跡を囲むように，放射状に位置している。しかし，その性格は，貝塚や発掘調査の実施された少数の遺跡を除いては不明である。

弥生時代の遺跡は２箇所確認されている。本鹿又遺跡では，旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡からは，土器は採集されていないが，アメリカ式石鏃が採集されている。

古墳時代の遺跡は８箇所確認されている。須江糠塚遺跡では，前期(塩釜式期第ⅡＢ段階)の竪穴住居跡が７軒検出されている。いずれも方形を基調としたもので，丘陵尾根上の平坦面に立地している(高橋・阿部：前掲)。

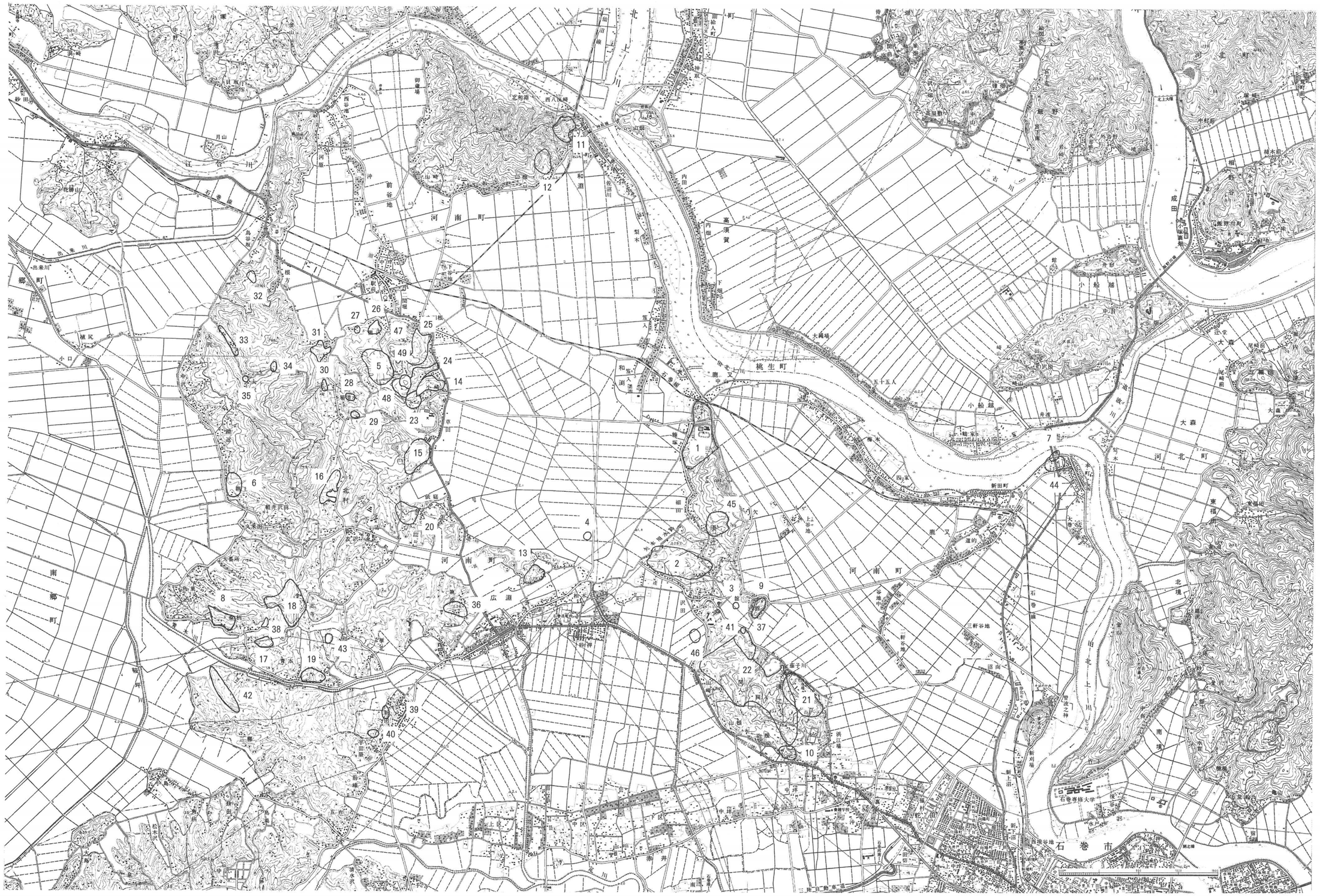
関ノ入遺跡からも，前期(塩釜式期第ⅡＢ～第Ⅲ段階)の竪穴住居跡が２軒検出されている。いずれも一辺が約３ｍ前後の方形を基調とした小型住居で，丘陵尾根上の平坦面に単独で立地している(佐藤：前掲，ほか)。

前山Ａ遺跡からも，前期(塩釜式期第ⅡＢ～第Ⅲ段階)の竪穴住居跡が１軒検出されている。一辺が約6.5ｍ前後の方形を基調とした大型住居で，丘陵尾根上の平坦面に立地している。

新田Ａ遺跡でも前期(塩釜式第ⅡＢ段階)の土師器が採集されている。鷺の巣遺跡からは，前期(塩釜式

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	須江糠塚遺跡（糠塚館跡）	集落跡 窯跡,城館	縄文(中),古墳(前),奈良,平安,中世	26	黒沢A遺跡	包含地	縄文,古代
2	須江瓦山窯跡	窯跡	奈良,平安	27	黒沢B遺跡	包含地	縄文,古代
3	池袋囲遺跡	包含地	古代	28	箱清水A遺跡	包含地	縄文(後),古代
4	広渕沼遺跡	包含地		29	箱清水B遺跡	包含地	縄文,古代
5	宝ケ峯遺跡	包含地 貝塚	縄文(中～晩),奈良,平安	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	31	小友遺跡	包含地	古代
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	32	高森山遺跡	包含地	古墳,古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	33	大沢A遺跡	包含地	縄文(後),古代
9	塩野田城跡（塩煮田館跡）	城館	中世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
10	宿屋敷跡	城館	中世	35	大沢C遺跡	包含地	縄文,古代
11	要害館跡（館山館跡）	城館	中世	36	夷田館跡	城館	近世
12	武田館跡（武田屋敷跡）	城館	中世,近世	37	代官山遺跡	集落跡 窯跡	縄文(後),奈良,平安
13	柏木館跡	城館		38	桑柄遺跡	包含地	古代
14	小崎館跡	城館	近世	39	新田A遺跡	包含地	古墳(前),古代
15	草田館跡（草田遺跡）	城館 包含地	縄文,中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡（高地谷館跡）	城館	中世	41	代官山横穴古墳群	横穴古墳	古墳,古代
17	青木館跡（林光館跡）	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文,古墳,奈良,平安,江戸
18	新城館跡（駒立館跡）	城館	中世	43	奈良山遺跡	窯跡	古代,江戸
19	駒場館跡	城館	中世	44	御塩蔵場跡	蔵跡	近世
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中・後),弥生,古代	45	細田遺跡	窯跡 包含地	縄文,奈良,平安
21	**長者館跡（長者平遺跡）**	**城館 包含地**	**縄文,古代,中世**	46	鷺の巣遺跡	包含地	古墳
22	**関ノ入遺跡**	**集落跡 窯跡**	**旧石器,縄文(前～後),古墳(前),奈良,平安,中世**	47	前山B遺跡	包含地	縄文,古代
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中～晩),奈良,平安 中世	48	前山C遺跡	集落跡	縄文(後・晩),奈良,平安
24	太田沢遺跡	集落跡	縄文(晩),古代	49	前山D遺跡	集落跡	縄文(中～晩),奈良,平安
25	前山A遺跡	集落跡	縄文,古墳(前),奈良,平安				

第1表　遺跡地名表



第１図　河南町の遺跡

本書に掲載の地図は，建設省土地理院長の承認を得て，同院発行の１／25,000地形図を複製したのもです。（承認番号 平12東複第73号）

終末段階)から中期(南小泉式)にかけての土師器が採集されている。後期の遺跡としては，代官山横穴古墳群がある。外に，時期は不明であるが，高森山遺跡，群田遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は28箇所確認されている。その大部分は丘陵上に展開されている。須江丘陵では，丘陵の北から南まで窯跡が分布している。昭和61年度に調査された須江糠塚遺跡では，奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡９軒，９世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡６基が検出されている。(高橋・阿部：前掲)。

昭和62年度から平成９年度にかけて継続的に発掘調査が行われた関ノ入遺跡では，奈良時代から平安時代前半までの竪穴住居跡50軒(国分寺下層式期18軒，表杉ノ入式期23軒，不明９軒)，９世紀初頭から10世紀前半にかけての須恵器を生産した窯跡23基，９世紀代を主体とする粘土採掘坑跡49基，水簸坑と推定される土壙８基,10世紀半ば以降と推定される製鉄遺構３基などが検出されている(中野・佐藤：前掲，佐藤：前掲，中野：本書ほか)。粘土採掘坑跡の多くは,前記俵庭層や表沢層の上に設けられている。これらの遺構に伴い，多数の土師器，須恵器が出土した。

須江瓦山窯跡には，奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は，『続日本紀』に記されている牡鹿郡家あるいは牡鹿柵跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木：1987.3，佐藤：1995.3，佐藤：1999.3ほか)。平成３年度の発掘調査では土壙29基,焼土遺構１基が検出されている。土壙の中には，粘土採掘坑跡と推定されるもの11基，須恵器甕を横位に埋設したもの１基があった。

代官山遺跡では，８世紀後半と９世紀後半の窯跡が各１基ずつと，８世紀末から９世紀初頭にかけての竪穴住居跡１軒が検出されている(佐藤：前掲)。

長者館跡(長者平遺跡)では，一辺約80m前後の方形区画を土塁状の遺構と溝状の遺構がめぐっている。溝状遺構は逆台形の断面形を呈し，上端幅約５～６m前後，下端幅約１m前後,最大深約1.8mの大規模な区画溝で，堆積土からは10世紀前半に降下したと考えられる十和田ａ火山灰が検出されている。近接した代官山遺跡より「佛」とヘラ書きされた土師器坏，関ノ入遺跡からは仏具を模倣したと考えられる土師器多口瓶・鉄鉢型の須恵器鉢,「佛」と墨書された須恵器蓋が出土していることから，古代寺院と何らかの関係がある遺構の存在が想定される(佐藤：前掲，本書)。

細田遺跡からは，採石工事現場隣接地より９世紀代の須恵器，土師器(表杉ノ入式)，窯体の一部が採集されている。また，別地点の道路法面と，平成10年度の確認調査によって採石工事現場内(現状保存箇所)の斜面に９世紀代の窯跡とそれに伴うと推定される須恵器が発見されている。採石工事現場内の窯跡は灰原を伴っている。また，上部平坦面からは表杉ノ入式の土師器と前記窯跡よりもやや古い時期の須恵器が採集されている。平成11年度の確認調査では表杉ノ入式期の竪穴住居跡４軒などとそれに伴う土師器・須恵器が発見されている。

以上，須江丘陵上に所在するこの時期の遺跡群は，いずれも須恵器や瓦の生産に係わっており，須江窯跡群として扱う必要がある(佐藤：前掲)。

旭山丘陵側に目を向けると，群田遺跡では，８世紀末から９世紀前半にかけての竪穴住居跡１軒とそれに後続する９世紀代の竪穴住居跡２軒，竪穴遺構７基，多量の骨片が入った須恵器甕を立位に埋設した土

壙１基などが検出されている(中野：1993.3)。

太田沢遺跡からは９世紀前半ころの竪穴住居跡１軒，灰白色火山灰層を伴う土壙が検出されている。また，前山Ｃ遺跡，前山Ｄ遺跡からは，表杉ノ入式の土師器が出土している。外に小崎遺跡，大沢Ｃ遺跡，俵庭遺跡などがある。

中世以降になると，須江や旭山の丘陵上など14箇所に葛西氏や長江氏に関連したと推定される城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は，金売吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右ヱ門の除屋敷跡とも言われる)との言い伝えがある。小規模な平山城の形態を呈しており,土塁状の遺構と溝状の遺構とこれらに囲まれた平場からなる。糠塚城跡(須江糠塚遺跡)は,古代の「中山柵跡」にも擬定されたこともあり(清水東四郎：1924.12,鈴木省三：1924.12),「仙台領内古城書上」によれば，東西20間，南北16間の規模で，館主は葛西氏家臣須藤勘解由左衛門であるとされている(「仙台叢書」：1971)。小規模な平山城の形態を呈しており，空堀が一部残存している。塩野田城跡は東西21間，南北27間の規模で，城主は葛西氏家臣須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。小規模な平山城の形態を呈しており，堀や土塁状遺構が一部残存している。夷田館跡は，葛西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。小規模な平山城の形態を呈している。多くの城館跡は，小規模な平山城の形態を呈しているが，年代，館主ともに不明である。

また，葛西氏の支配領域と推定される鹿又地区，須江地区を中心として，町内には，現在105基(鹿又55基，須江38基，北村８基，和渕３基,広渕１基)の板碑が確認されている。紀年銘の判読できるものの中で最古は弘安元年(1278)，最新は文明10年(1478)のものである(佐藤雄一：1986.11,1997.8)。残念ながら，多くの板碑は原位置を保っていない。これらの中には，特徴的な板碑もある。関ノ入遺跡出土の板碑の大部分は，木炭窯の焚口等を強化するために，複数の板碑を折って燃焼部の側壁などに貼り付けたような状況で出土した(中野：1994.6)。また，北村字高寺にある高福寺からは５基の板碑が発見されたが，いずれも江戸時代元禄期前後の墓碑に転用されている。その中には，天蓋と蓮台を有する阿弥陀三尊板碑や五輪塔の正面に刻まれる「キャ・カ・ラ・バ・ア」を左右対称に刻んで五輪塔を型取った「五輪塔板碑」と呼ばれるものもある。発見地点の西側背後に小規模な平山城の形態を呈した新城館跡があること，阿弥陀三尊板碑の願文に「鎌倉権五郎五代」の文字が見受けられること，高福寺自体も石巻市湊の多福院に所在する板碑に「高福」という寺院名が刻まれていることから中世に存在したと推定されること，江戸時代以前に新城館跡の東側から群田遺跡の西脇を通過して小野(鳴瀬町)に通じる道があったとされることなどから，深谷荘の領主であった長江氏に関連した中世的世界が想定される。外に，『吾妻鏡』仁治２年(1241)５月10日条に記されている「追入(笈入)」に所在する済北寺からも鎌倉時代末期の板碑が２基発見されている。以上，町内に現存する板碑は，全て「稲井石」と呼ばれる粘板岩製である。外に，小崎遺跡からは，中世陶器片や北宋銭(皇宋通寶)が出土している。

江戸時代になると，川村孫兵衛による旧北上川や江合川の改修工事や治水工事が行われ，舟運が盛んになる。平成２年度と11年度に調査された御塩蔵場跡では，基壇状遺構(上面：約400㎡)と礎石,焼面遺構が検出されている(佐藤：1991.3ほか)。御塩蔵場は，桃生，牡鹿，本吉，気仙の海道四郡から運送された塩を納庫したとされる仙台藩の塩の保管施設である(「風土記御用書上」)。群田遺跡からは，主に18・19世紀

代の陶器・磁器などが出土して井戸跡や建物を区画するような溝があること,「風土記御用書上」に「一．郡田屋敷　弐軒」と記されていることから屋敷跡と考えられる整地面1箇所，墓壙1基が検出されている(中野：前掲)。外に,小野－広渕－糠塚－和渕－気仙沼をつなぐ東浜街道や石巻－広渕－箱清水－前谷地－涌谷をつなぐ涌谷街道，そしてこれらの街道に伴う4箇所の一里塚跡，涌谷街道上の桃生郡と遠田郡の郡境に設けられた鳥谷坂番所跡，瓦や陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡や須江瓦山窯跡，仙台藩の財政建て直し策の一環として寛文2年(1662)から同5年(1665)にかけて築造された深谷地方の新田開発に係る用水確保のための広渕沼(大溜地・大堤)，そこに名鰭沼から水を引くための継入堀，松ケ窪，長岩堰，新継入堀の潜穴跡，広渕沼から鹿又村へ農業用水を引くための糠塚潜穴跡，嘉右ヱ門堀などがある。

Ⅱ．調査経過

1．調査に至る経過

関ノ入遺跡及び長者館跡の所在する宮城県桃生郡河南町須江にある須江丘陵南部地域は，石巻市に隣接する地域であることからスプロール化が進み，これまでに大小多くの開発が行われてきた場所である。それは，河南町による工業団地用地造成工事，河南町関ノ入土地区画整理組合による住宅団地用地造成工事，齋藤建設株式会社による土砂採取工事，各電信会社による無線中継所設置工事，個人住宅の建設，そして石巻地方広域水道企業団(以下「水道企業団」)による須江山浄水場建設工事などである。

須江山浄水場配水地築造工事は,水道企業団による宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入290番地内における配水地の築造(増設)事業である。水道企業団は,石巻市･矢本町･鳴瀬町の1市2町に上水道を供給する公共団体である。昭和63年に現在地に浄水場を設けて以来，11年にわたって給水を続けてきた。その間，1市2町の給水の需要に応えてきたが，今後の需要の伸びを見越して，今回の事業を計画するに至った。

本事業の予定地は，平成3・4年度に河南町教育委員会により須江山浄水場建設(拡張)工事に伴う事前調査を実施した箇所の隣接地であり，周知の埋蔵文化財包蔵地である関ノ入遺跡及び長者館跡の範囲内に含まれていた。そこで，本事業を計画した水道企業団は，平成9年4月，河南町教育委員会に事業予定地についての文化財についての関わりに関する協議を申し出，両者は協議に入った。

同年5月，河南町教育委員会は配水地築造工事予定地の現地踏査を行った。遺物は採取されなかったものの，比較的平坦な面と緩やかな斜面であったため，遺構や遺物の存在は，十分予想される状況であった。また，平成3年度の確認調査で発見された古代の溝(44号溝状遺構)が今回の調査区に向かって続いており，その周辺状況を確認する必要があった。

そこで，同年7月，河南町教育委員会は確認調査を実施し，事業計画区域内の遺構の分布状況や遺跡の性格の把握に務め，竪穴住居跡，土壙，焼土遺構，小溝状遺構などを発見した。

その成果を踏まえ，同年7月，河南町教育委員会は，記録保存を目的とする発掘調査を実施するための活動を開始した。

2．調査の方法と経過

今回の発掘調査は，水道企業団による配水池の築造(増設)事業予定地が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会：1993.3)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である関ノ入遺跡及び長者館跡の範囲内に存在するため，遺跡の立地する丘陵頂部平坦面及び斜面を対象として実施したものである。

確認調査は，丘陵の地形に則って３～６ｍ幅のトレンチを２～６ｍの間隔をもって設定して，重機あるいは一部人力によって表土除去を行い，遺構を確認した。

これによって，調査区内の遺構の分布が把握され，全面に遺構が点在することが確認された。また，グリッドの設定，表記については，国家座標のＸ軸，Ｙ軸に基づいて原点を設置し，東西方向をアルファベット，南北方向をアラビア数字で表し，両者の組合せでグリッド名を表記した。

事前調査は，遺構が調査区全面に点在することから，ほぼ全面について行った。効率的に調査を進めるため，重機を用いて表土を除去し，人力による精査の上，遺構を確認した。その結果，竪穴住居跡１軒，粘土採掘坑跡１基，溝状遺構２条，土壙14基，焼土遺構３基，小溝状遺構３基を検出した。

検出した遺構の実測図は，全て1／20図で作成した。

また，平成８年３月に関ノ入遺跡より旧石器が発見されたことから，本調査区内における旧石器の有無を確認するためのトレンチを２本設定した。旧石器の出土する可能性のある層は人力で，ない層は重機を用いて覆土を除去した。トレンチの設定箇所の平面図については1／100図で作成した。
調査区の範囲実測図については，１／500図で作成した。

発掘調査は，平成９年７月７日から確認調査を開始し，同年７月15日に終了した。引き続き事前調査に移行し，同年12月18日までに遺構の平面図・断面図，写真，調査区の全景写真及び文章記録等の記録化を全て完了し，調査を終了した。

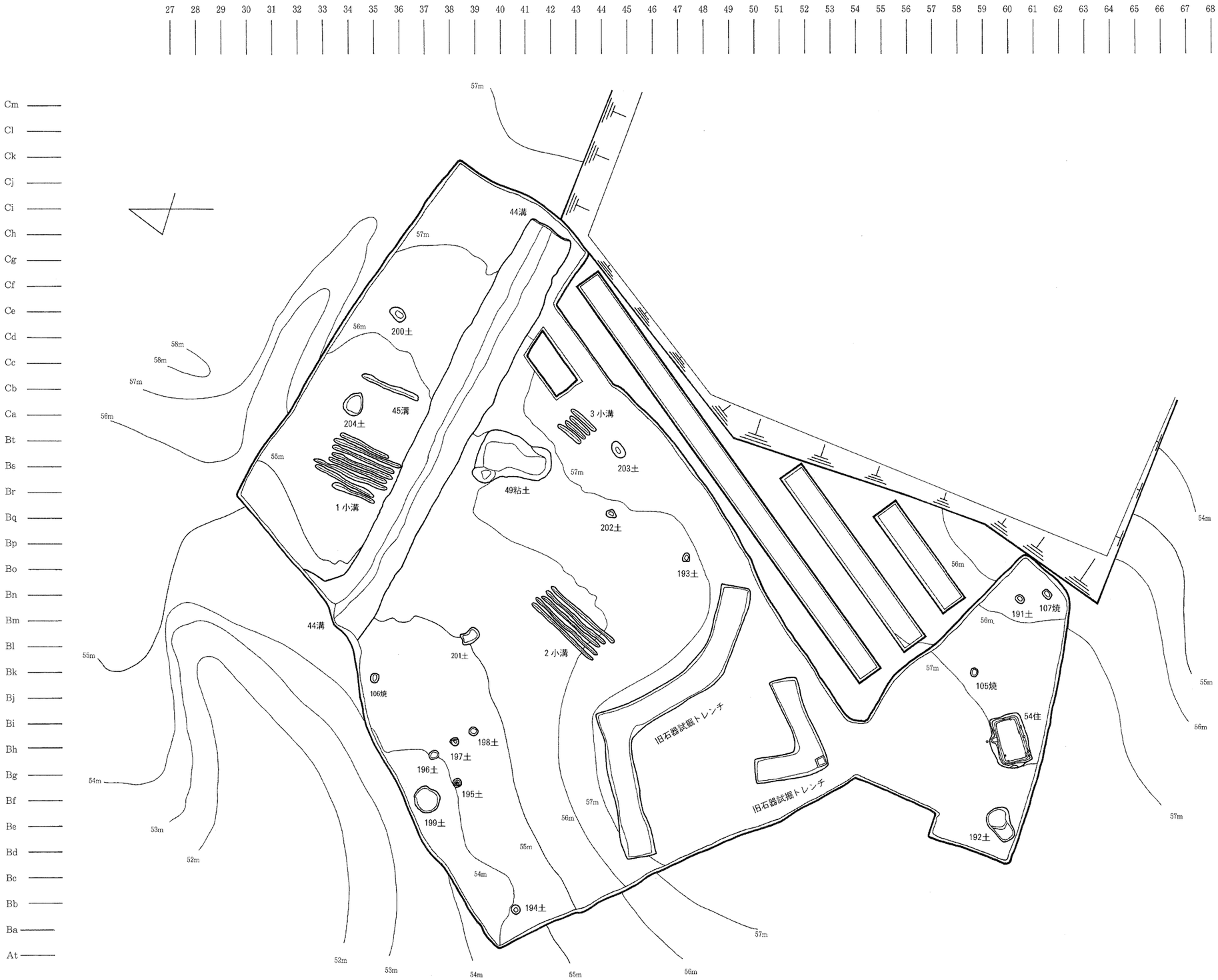
Ⅲ．基本層序

今回の調査区は，丘陵頂部平坦面と斜面からなる。斜面は，多少の緩急はあるものの，ほぼ同一の傾斜を呈する。平成３・４年度の調査区における丘陵頂部平坦面と急斜面の南東に続く頂部平坦面と斜面で，基本的には前回の調査区とほぼ同一の層準を示している。

〔Ⅰ層〕褐(10ＹＲ4/4)色のシルトである。本遺構の表土で，調査区全域に分布する。粘性はなく，しまりに欠ける。層厚は，10～30㎝である。現状は杉や雑木の山林と荒地である。層中には，少量の土師器，須恵器が含まれる。

〔Ⅱ層〕にぶい黄褐(10ＹＲ4/3)色のシルトである。調査区全域に分布する。Ⅰ層よりも粘性があり，しまりに欠け，礫をまばらに含む。層厚は，20～40㎝である。層中には，少量の縄文土器，土師器，須恵器，石器が含まれる。

〔Ⅲ層〕黄褐(10ＹＲ5/6)色，またはにぶい黄橙(10ＹＲ6/4)色のシルト質粘土である。層中に砂を含む。丘陵頂部平坦面に分布する。今回の調査における遺構の大部分は，本層上面で確認されている。また，旧


27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68
Cm
Cl
Ck
Cj
Ci
Ch
Cg
Cf
Ce
Cd
Cc
Cb
Ca
Bt
Bs
Br
Bq
Bp
Bo
Bn
Bm
Bl
Bk
Bj
Bi
Bh
Bg
Bf
Be
Bd
Bc
Bb
Ba
At
44溝
200土
45溝
204土
1小溝
49粘土
3小溝
203土
202土
193土
2小溝
201土
106焼
198土
197土
196土
195土
199土
194土
191土
107焼
105焼
54住
192土
旧石器試掘トレンチ
旧石器試掘トレンチ

第２図　遺構配置図

石器試掘トレンチの層厚は，20～50cmである。遺物は出土しない。

〔Ⅳ層〕明赤褐(５ＹＲ5/8)色のシルト質粘土である。調査区の南側及び東側の一部に分布する。旧石器試掘トレンチの第２層である。層厚は，５～20cmである。49号粘土採掘坑跡，44号溝状遺構の一部は，本層上面で確認されている。遺物は出土しない。

〔Ⅴ層〕明褐(7.5ＹＲ5/6)色のシルト質粘土である。部分的に，灰黄(2.5Ｙ7/2)のシルト質粘土を斑状に含む。49号粘土採掘坑跡，44号溝状遺構の壁面の一部を構成する。調査区の東側で確認された。旧石器試掘トレンチの第３層である。層厚は，10～40cmである。平成８年旧石器が出土した層位である。今回，遺物は出土しなかった。

〔Ⅵ層〕灰黄(2.5Ｙ7/2)色の粘土である。良質の粘土で，49号粘土採掘坑跡，44号溝状遺構の底面の全て及び壁面の一部を構成する。旧石器試掘トレンチの第４層である。層厚は，３ｍにも及ぶ。遺物は出土しない。

〔Ⅶ層〕明赤褐(５ＹＲ5/8)色のシルト質粘土である。層中に多量の礫を含む。遺物は出土しない。

Ⅳ．検出された遺構

今回の調査では，竪穴住居跡１軒，粘土採掘坑跡１基，溝状遺構２条，土壙14基，焼土遺構３基，小溝状遺構３基が検出された。遺物は，石器，古墳時代の土師器，平安時代の土師器，須恵器が出土した。

１．竪穴住居跡

(1)54号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

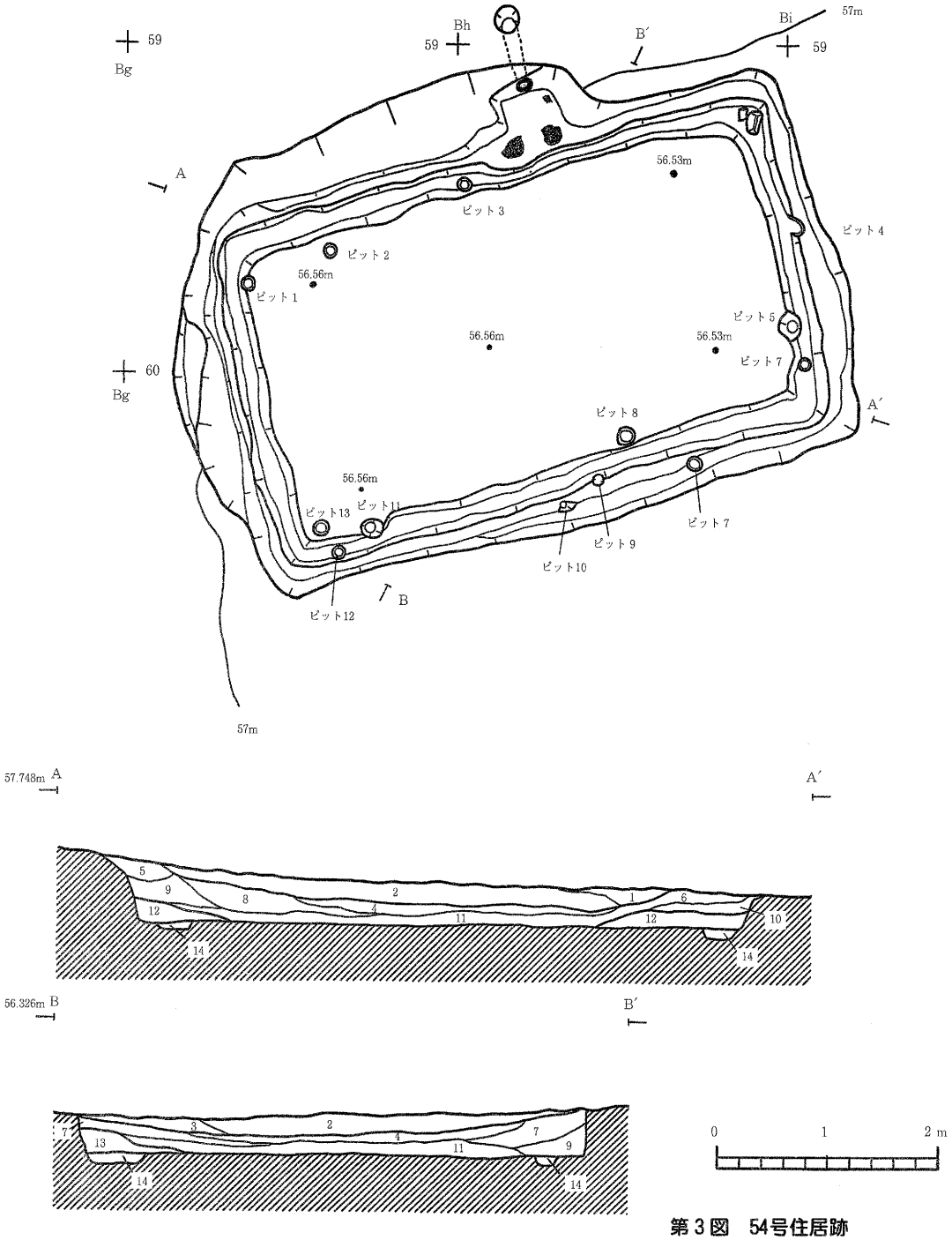
〔規模・平面形〕全ての壁が検出された。残存する各壁の幅は，それぞれ北西壁5.48m，北東壁3.44m，

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐10ＹＲ4/4	シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	竪穴１層
2	黒褐10ＹＲ2/3	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	
3	黒褐10ＹＲ3/2	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の灰白色火山灰を粒状に含。	
4	黄褐2.5Ｙ5/4	火山灰	少量の黒褐10ＹＲ２/３シルトを塊状，炭化物を粒状に含。	竪穴２層
5	黄褐10ＹＲ5/6	砂質粘土	少量の地山土を塊状に含。	竪穴３層
6	暗褐10ＹＲ3/4	粘土質シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	竪穴４層
7	褐10ＹＲ4/4	シルト質粘土	少量の地山土を塊状，灰白色火山灰・炭化物を粒状に含。	
8	褐10ＹＲ4/4	砂質粘土	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
9	褐7.5ＹＲ4/6	シルト質粘土	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
10	黄褐10ＹＲ5/8	シルト質粘土	少量の灰白色火山灰を塊状，地山土・炭化物を粒状に含。	竪穴５層
11	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
12	黄褐10ＹＲ5/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
13	黄褐10ＹＲ5/8	粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
14	褐10ＹＲ4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状，地山土を粒状に含。	周溝
15	明赤褐５ＹＲ5/6	シルト	少量の焼土を粒～塊状，炭化物を粒状に含。	煙道

第２表　54号住居跡土層註記表

堆積土	土色	土性	備考
Ｐ１	褐10ＹＲ4/4	シルト質粘土	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ２	褐10ＹＲ4/4	シルト	少量の地山土を粒～塊上,炭化物を粒状に含。
Ｐ３	褐10ＹＲ4/4	粘土質シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含。
Ｐ４	褐10ＹＲ4/4	シルト	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ５	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ６	褐10ＹＲ4/4	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒～塊状に含。
Ｐ７	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含。押立？
Ｐ８	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ９	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ10	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	シルト	少量の炭化物・地山土を粒～塊状に含。
Ｐ11	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。
Ｐ11掘方	にぶい黄褐10ＹＲ4/3	粘土質シルト	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ12	褐10ＹＲ4/4	シルト	少量の地山土を粒～塊状,炭化物を粒状に含。
Ｐ13	褐10ＹＲ4/4	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒～塊状に含。

第３表　54号住居跡ピット土層註記表



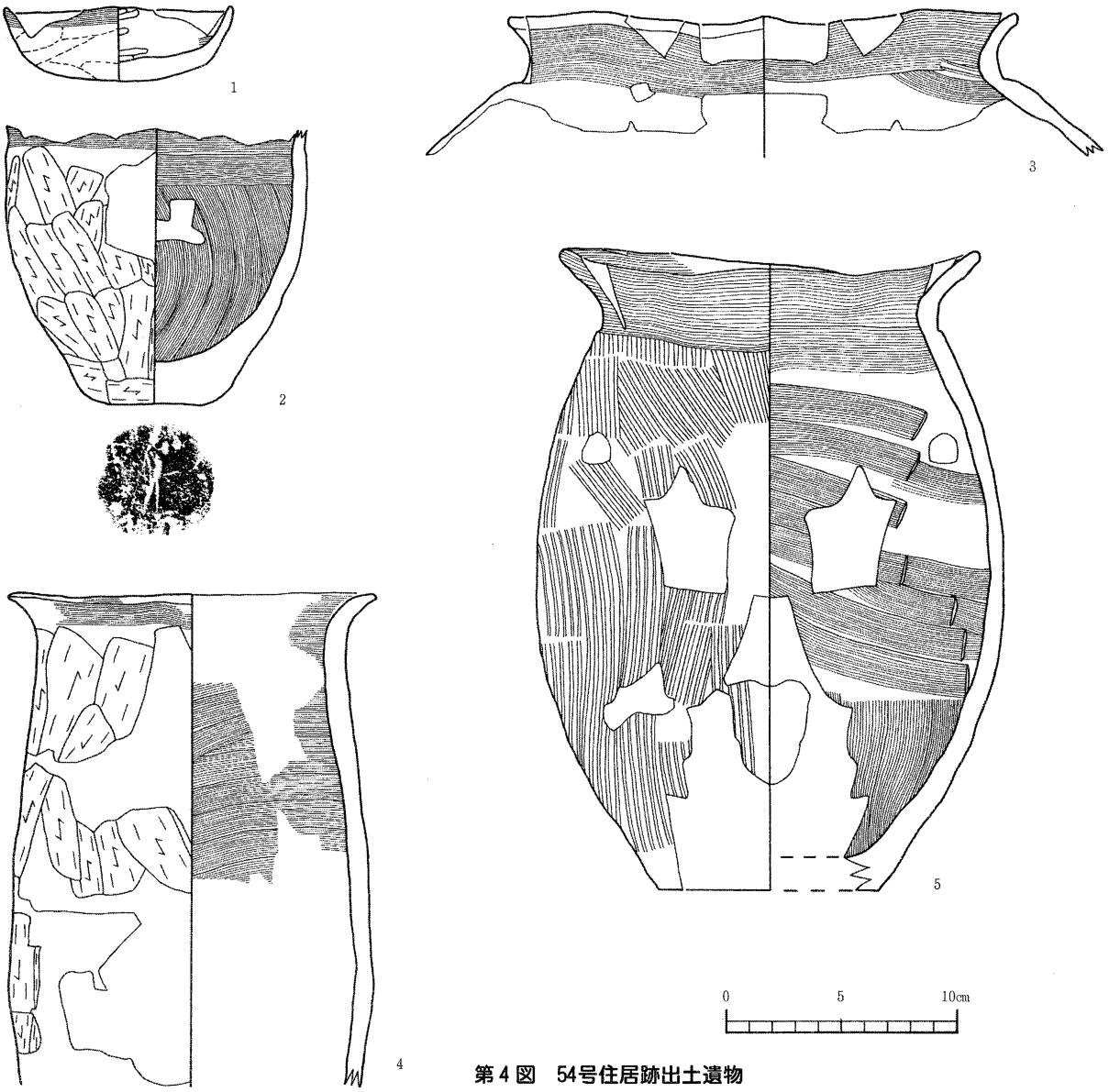
第３図　54号住居跡

南東壁5.50m，南西壁3.60mである。平面形は，長方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕５層に大別，15層に細分される。自然堆積層，壁崩落土，灰白色火山灰層からなる。層No.１～３・層No.５～11・14・15は自然堆積層，層No.12．13は壁崩落土，層No.４は灰白色火山灰層(註)である。

〔壁〕基本層序Ⅲ層及びⅣ層からなる。最も保存の良い北西壁では62cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。南西壁の中央部には，階段状に１段の刻みがある。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。凹凸はなく，貼床が部分的に施されている。全体としてほぼ平坦であるが，床面レベルは北西隅が最も高く南東隅に向かうにつれてレベルを減じる。



第4図　54号住居跡出土遺物

No.	種　別	層　位	外　面	底　部	内　面	口径・底径・器高（cm）	備　考
1	土師器杯	――	ヨコナデ，ミガキ又は削り	ミガキ又は削り	ミガキ，ナデ	9.8・5.0・3.2	図版2－2－1
2	土師器甕	――	ヨコナデ，削り	木　葉　痕	ヨコナデ，ナデ	――・4.3・――	図版2－2－3
3	土師器甕	――	ヨコナデ，マメツ	――	ヨコナデ，刷毛目，ナデ	22.0・――・――	図版2－2－4
4	土師器甕	――	ヨコナデ，ヘラ削り	――	ヨコナデ，ナデ	16.0・――・――	図版2－2－5
5	土師器甕	――	ヨコナデ，刷毛目	木　葉　痕	ヨコナデ，ヘラナデ，ナデ	18.0・9.6・27.0	図版2－2－2

第4表　54号住居跡出土遺物観察表

〔柱穴〕13個のピットが検出された。ピットNo.1．3～13は柱穴である。全ての柱穴が周溝に沿って据えられていた。ピットNo.8・11は主柱穴，ピットNo.1・3～7・9～11・13は壁柱穴と考えられる。西壁の中央部及び北西壁のカマド東側では検出されなかった。床面の貼床下面からは発見されなかった。掘り込みの深いもの(ピットNo.5，8，10，12)と浅いもの(ピットNo.1，3，4，6，7，9，11)の2種類が存在した。ピットNo.2は柱穴ではない。

〔カマド〕北西壁のはぼ中央に位置しており，燃焼部側壁及び底面の一部と煙道部が検出された。燃焼部は奥行き0.53m，幅0.66m，残存高0.35mで，平面形は壁をかまぼこ形に抉ったような形状を呈している。

底面及び側壁・奥壁が，強い火熱により赤変していた。煙道部は，奥壁の中程を円形にトンネル状にくり抜いたものである。長さ0.70m，幅0.13mの規模で，その底面レベルは先端に近づくにつれて高くなる。先端からは，煙出しピットが検出された。堆積土は単層である。

〔周溝〕全ての壁から検出された。壁沿いに一周する。幅14～28cm，深さ5～10cmで，断面は「U」字形である。底面レベルは北西壁側が最も高く，北東壁側に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕床面を中心として，土師器の一括遺物が出土した。

（註） 本層は，㈱古環境研究所　早田勉氏より915年に降下した十和田a火山灰と同定されるとのご教示を得ている。また，49号粘土採掘坑跡層№7，44号溝状遺構層№17に堆積していた灰白色火山灰層も同様である。

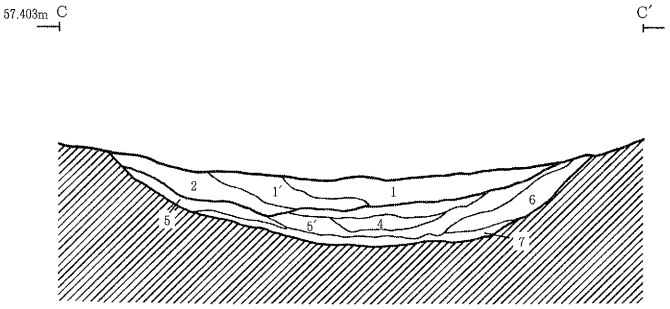
2．粘土採掘坑跡

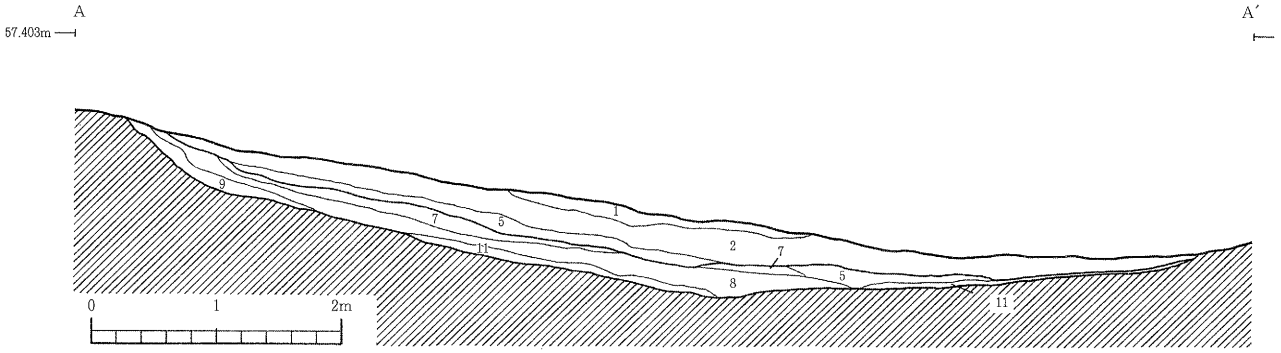
(1)49号粘土採掘坑跡

調査区北東部緩斜面の基本層序Ⅲ層及びⅣ層から確認された。重複は認められない。長軸8.91m，短軸5.11m，深さ0.96mの規模で，平面形は不整円形を呈する。底面は一部凹凸があり，壁は南側の面はやや緩やかに，その外の面は急に立ち上がる。底面及び壁は3種類の粘土層(基本層序Ⅳ層～Ⅵ層)からなる。堆積土は11層に細分され，層№1～6，8～11は自然堆積層，層№7は灰白色火山灰層である。今回の調査で検出された遺構の中では，堆積土に粘土または粘土質土を含む割合が最も高い。

№	土　色	土　性	備　考	大別
1	暗褐10YR3/4	シルト	少量の地山土を塊状に含。	自然堆積層
2	暗褐10YR3/3	粘土質シルト	少量の地山土を塊状に含。	
3	にぶい黄褐10YR4/3	粘土質シルト	少量の炭化物と地山土を粒状に含。	
4	褐10YR4/4	粘土質シルト	少量の地山土を塊状に含。	
5	黒褐10YR2/3	粘土質シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
6	にぶい黄褐10YR4/3	粘土質シルト	少量の灰白色火山灰を塊状に含。	
7	灰白2.5Y7/1	火山灰	少量の黒褐10YR2/3シルトを塊状に含。	火山灰層
8	褐10YR4/4	シルト質粘土	少量の炭化物と灰白色火山灰を粒状に含。	自然堆積層
9	褐7.5 YR4/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
10	褐10YR4/4	粘土		
11	黄褐10YR5/8	粘土		

第5表　49号粘土採掘坑跡土層注記表





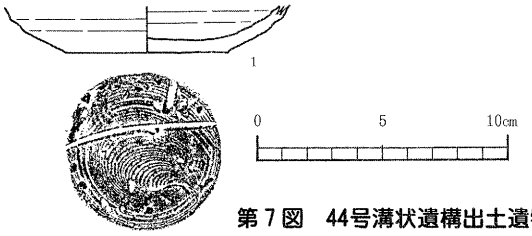
第5図　49号粘土採掘坑跡（1）

第６図　49号粘土採掘坑跡（２）

3．溝状遺構

(1)44号溝状遺構

調査区北東部から北部平坦面にかけての基本層序Ⅲ層及びⅣ層から確認された。重複は認められない。上端6.71～4.96m，底面幅1.56～0.66m，深さ1.79～0.65mの規模で，断面形は逆台形を呈する。調査区を北東部から北部にかけて横断し，全長52.63mである。調査区北部端で北側に向かって屈曲するプランが一部確認された。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。底面レベルは北東端が最も高く，北部端に向かうにつれてレベルを減じる。堆積土は35層に細分され，層№1は人為的埋土，層№2～16・層№18～21・層№23～35は自然堆積層，層№22は壁崩落土，層№17は灰白色火山灰層である(本遺構の平面図・断面図を記載した「第8図　44号溝状遺構」は巻末の袋中に



第7図　44号溝状遺構出土遺物

№	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備考
1	須恵器坏	堆積土中	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	－・6．4・－	図版10－3

第6表　44号溝状遺構出土遺物観察表

№	土色	土性	備考	大別
1	黄褐10YR5/8	シルト質粘土	多量の褐10YR4/4 シルト質粘土を塊状に含。	人為的埋土
2	褐10YR4/4	シルト質粘土	多量の地山土を塊状に含。少量の橙7.5YR6/8粘土質シルトを塊状，炭化物を粒状に含。	自然堆積層
3	暗褐10YR3/4	シルト	少量の橙7.5YR6/8 粘土質シルトを塊状，炭化物を粒状に含。	
4	黒褐10YR2/3	シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
5	暗褐10YR3/4	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	
6	黒10YR2/1	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含。	
7	褐10YR4/6	シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
8	灰黄褐10YR4/2	粘土質シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒に含。	
9	にぶい黄褐10YR4/3	粘土質シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
10	褐10YR4/4	粘土質シルト	少量の地山土・灰白色火山灰を塊状，炭化物を粒状に含。	
11	褐10YR4/6	シルト質粘土	多量の地山土を塊状に含。少量の灰白色火山灰を塊状に含。	
12	にぶい黄褐10YR5/4	シルト	多量の灰白色火山灰・地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	
13	明黄褐10YR7/6	シルト	少量の灰白色火山灰を粒状に含。	
14	にぶい黄褐10YR5/4	粘土質シルト	少量の灰白色火山灰を塊状，炭化物を粒状に含。	
15	褐10YR4/4	シルト質粘土	少量の灰白色火山灰を塊状に含。	
16	黄褐10YR5/8	粘土	少量の炭化物・灰白色火山灰を塊状に含。	
17	にぶい黄橙10YR7/3	火山灰	少量の炭化物を粒状に含。	火山灰層
18	黒褐10YR3/2	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
19	褐10YR4/4	粘土質シルト	多量の壁崩落土を塊状に含。少量の灰白色火山灰・炭化物を粒状に含。	
20	暗褐10YR3/4	砂質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
21	にぶい黄褐10YR5/3	粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
22	黄褐10YR5/8	砂質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	壁崩落土
23	明褐7.5YR5/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
24	黄褐10YR5/8	砂質粘土	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
25	にぶい黄褐10YR5/3	シルト質粘土	少量の地山土を塊状に含。	
26	浅黄橙7.5YR8/3	粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
27	にぶい黄褐10YR5/3	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
28	黄褐10YR5/8	粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
29	黄褐10YR5/6	粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
30	明褐10YR5/8	粘土	少量の炭化物を塊状と粒状に含。	
31	明褐7.5YR5/8	粘土	少量の黒褐10YR3/2シルト質粘土を塊状，炭化物を粒状に含。	
32	明褐灰7.5YR7/2	粘土		
33	明褐7.5YR5/8	砂質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
34	褐10YR4/6	粘土	少量の地山土を粒～塊状，炭化物を粒状に含。	
35	明黄褐10YR6/8	粘土	少量の炭化物を粒～塊状に含。	

第7表　44号溝状遺構土層注記表

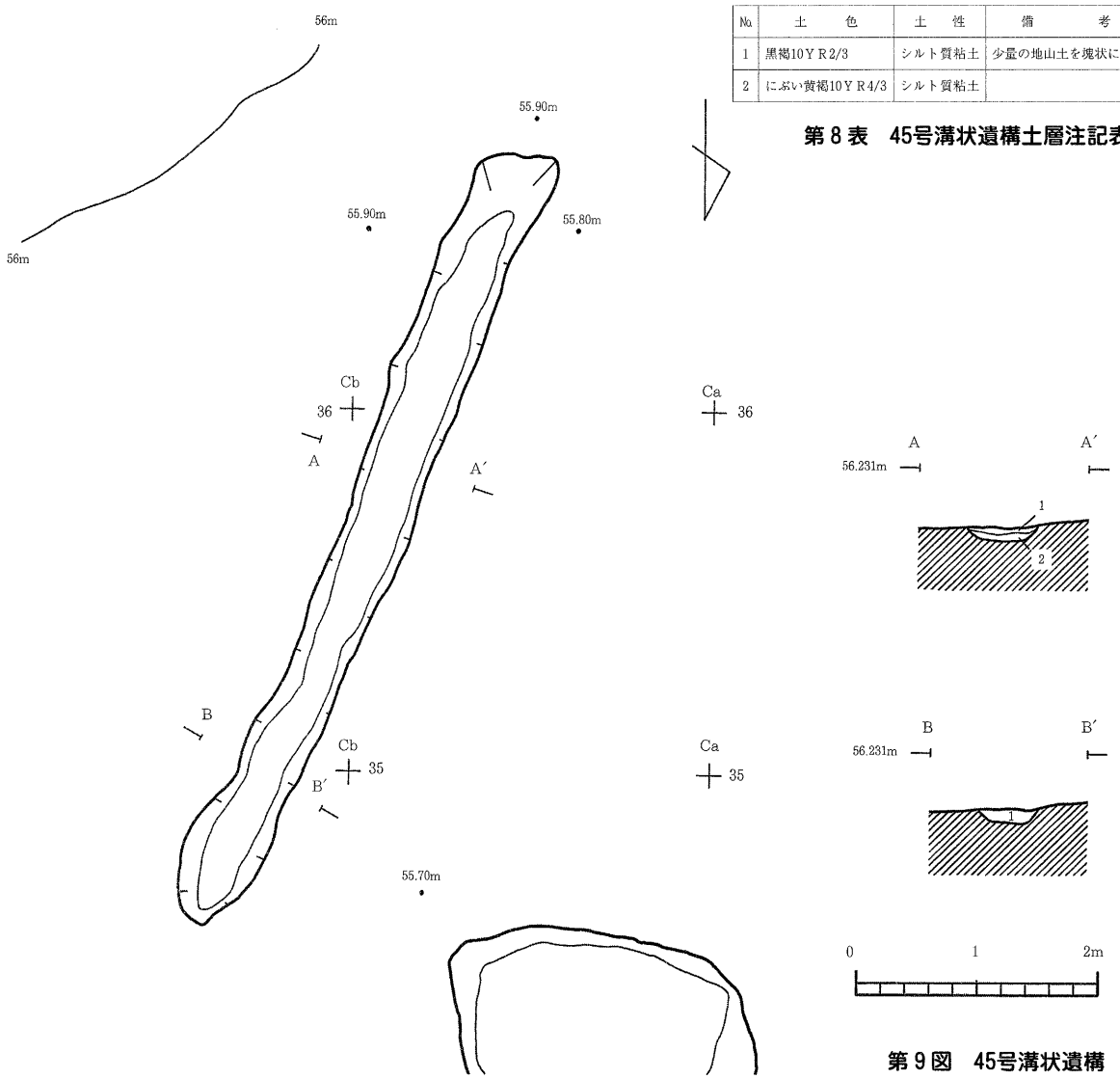
あり)。遺物は須恵器の破片が出土した。

(2)45号溝状遺構

調査区北東部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。上端0.60～0.54m，底面幅0.50～0.16m，深さ0.18～0.05mの規模で，断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は2層に細分され，いずれも自然堆積層である。

No	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒褐10YR2/3	シルト質粘土	少量の地山土を塊状に含。	自然堆積層
2	にぶい黄褐10YR4/3	シルト質粘土		

第8表　45号溝状遺構土層注記表



第9図　45号溝状遺構

4．小溝状遺構

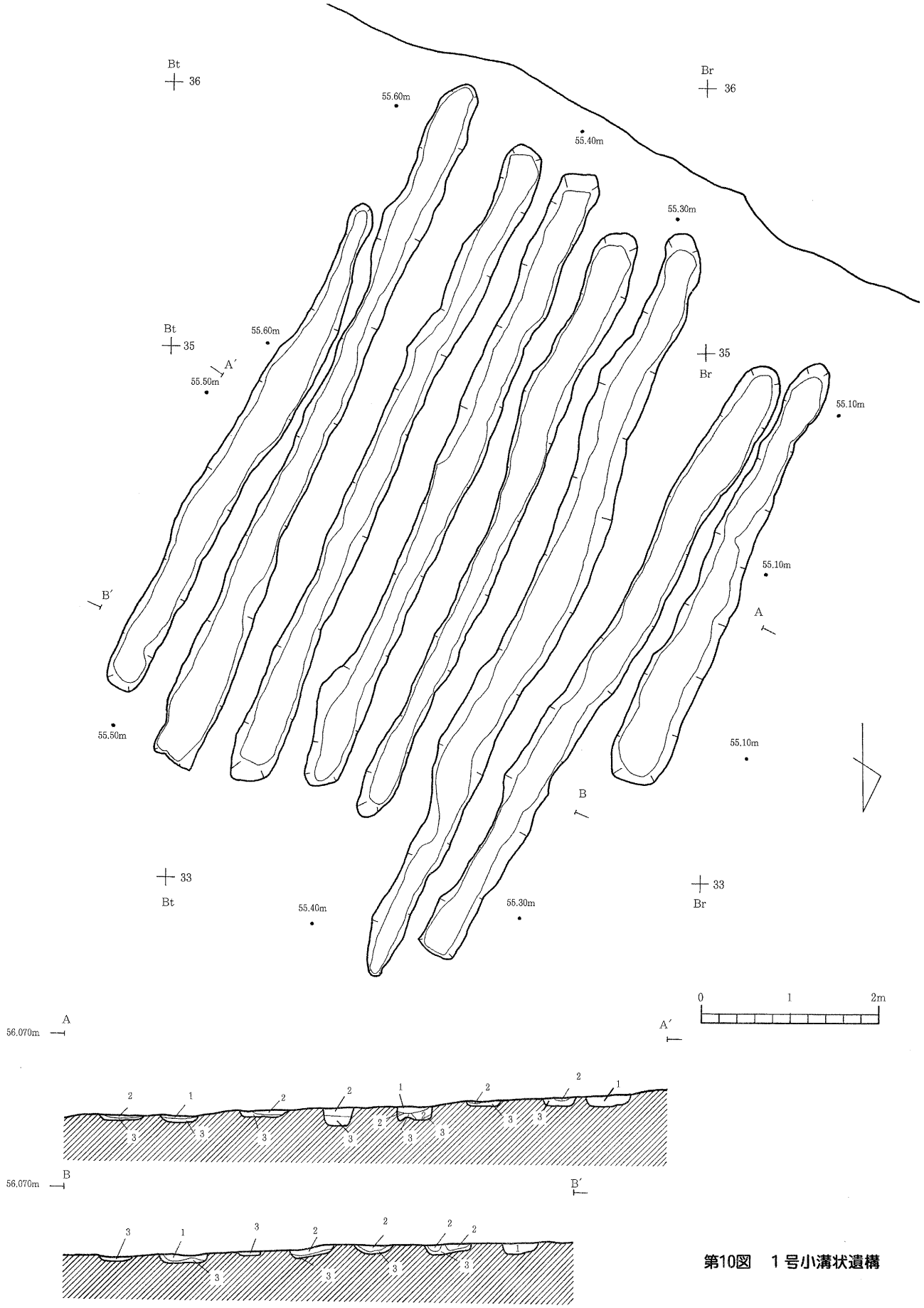
(1)1号小溝状遺構

調査区北部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。8条からなり，一部が攪乱穴に切られている(平面図は推定復元)。残存長5.14m～9.01m，上端0.64～0.26m，底面幅0.48～0.17m，深さ0.15～0.02mの規模で，断面形は「U」字形または逆台形を呈する。

No	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒褐10YR2/3	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	褐10YR4/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
3	明褐7.5YR5/6	粘　土	少量の炭化物を粒状に含。	

第9表　1号小溝状遺構土層注記表

底面は船底形または平坦で，壁は急に立ちあがる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。



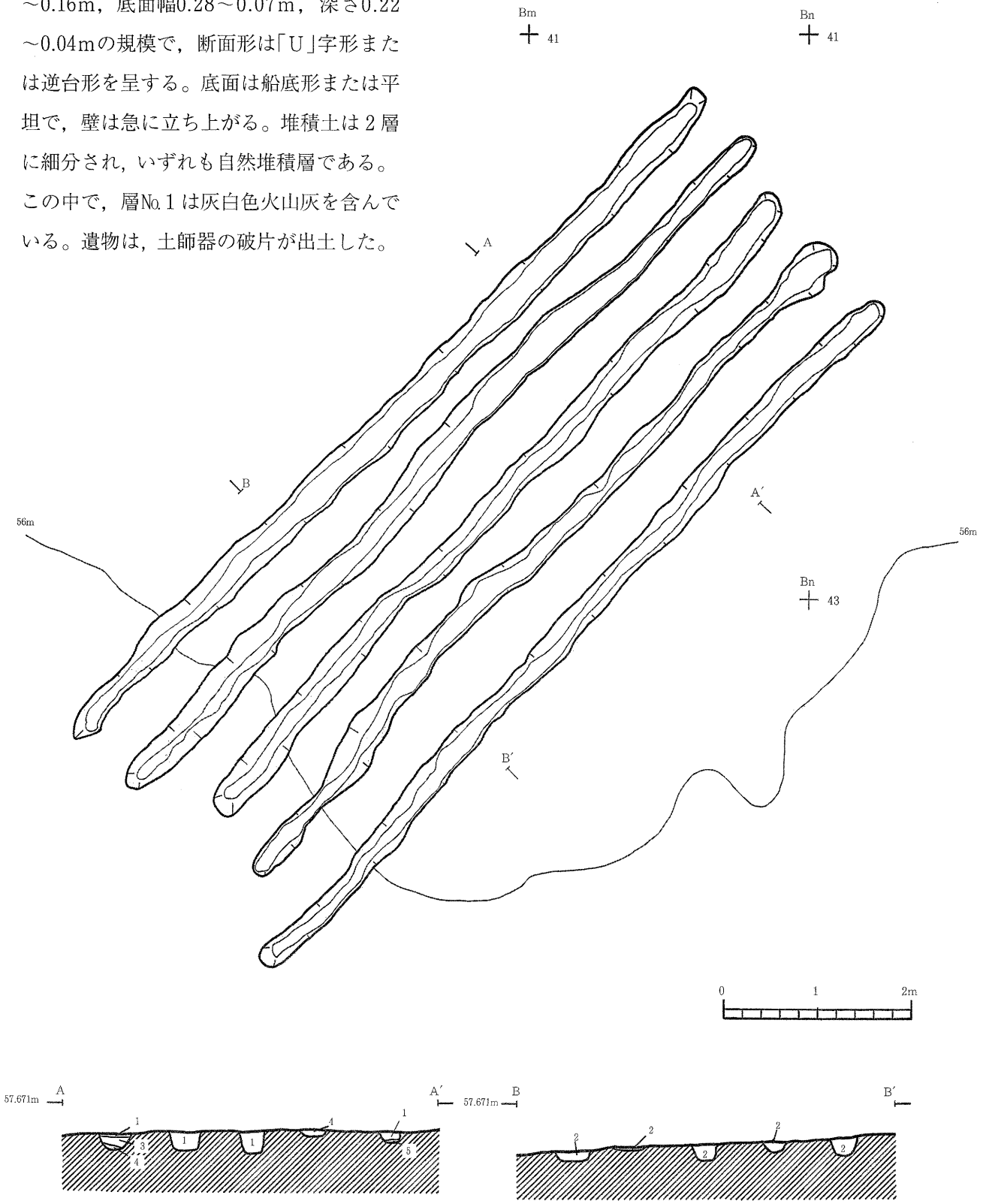
第10図　1号小溝状遺構

(2) 2号小溝状遺構

調査区中央部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。5条からなり，重複は認められない。残存長8.83m～9.61m，上端0.39～0.16m，底面幅0.28～0.07m，深さ0.22～0.04mの規模で，断面形は「U」字形または逆台形を呈する。底面は船底形または平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は2層に細分され，いずれも自然堆積層である。この中で，層No.1は灰白色火山灰を含んでいる。遺物は，土師器の破片が出土した。

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の灰白色火山灰・地山土を塊状，炭化物・焼土を粒～塊状に含。	自然堆積層
2	黒褐10YR2/3	シルト	多量のにぶい黄褐10YR4/3シルトを塊状に含。少量の地山土を粒状，炭化物・焼土を粒～塊状に含。	
3	暗褐10YR3/4	シルト	少量の炭化物・焼土を塊状に含。	
4	褐10YR4/6	シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
5	灰黄褐10YR5/2	砂質粘土		

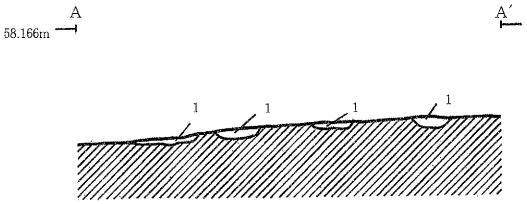
第10表　2号小溝状遺構土層註記表



第11図　2号小溝状遺構

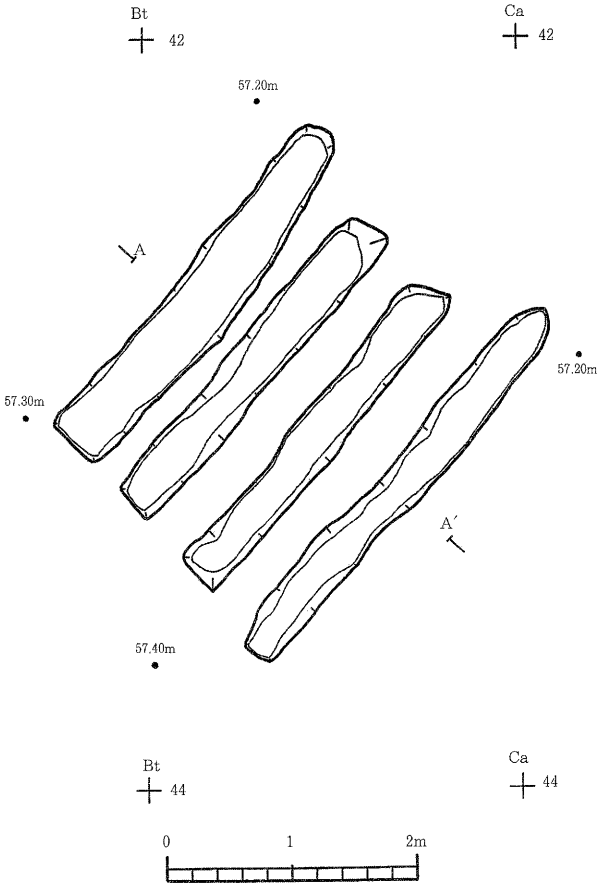
(3) 3号小溝状遺構

調査区北東部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。4条からなり，重複は認められない。残存長2.98m～3.61m，上端0.57～0.29m，底面幅0.44～0.18m，深さ0.10～0.01mの規模で，断面形は「U」字形または逆台形を呈する。底面は船底形または平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，多量の灰白色火山灰を含む。自然堆積層である。



No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	明黄褐10YR6/8	粘土質シルト	多量の灰白色火山灰を塊状に含。少量の地山土を塊状に含。	自　然堆積層

第11表　3号小溝状遺構土層註記表

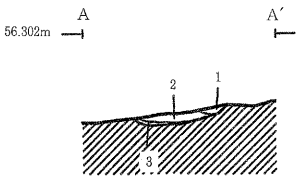


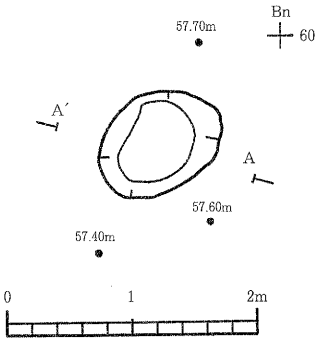
第12図　3号小溝状遺構

5．土壙

(1)191号土壙

調査区北東部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸1.04m，短軸0.79m，深さ0.16mの規模で，平面形は楕円形を呈する。底面は平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。層No.1，層No.2，層No.3の全てが灰白色火山灰を含んでいる。





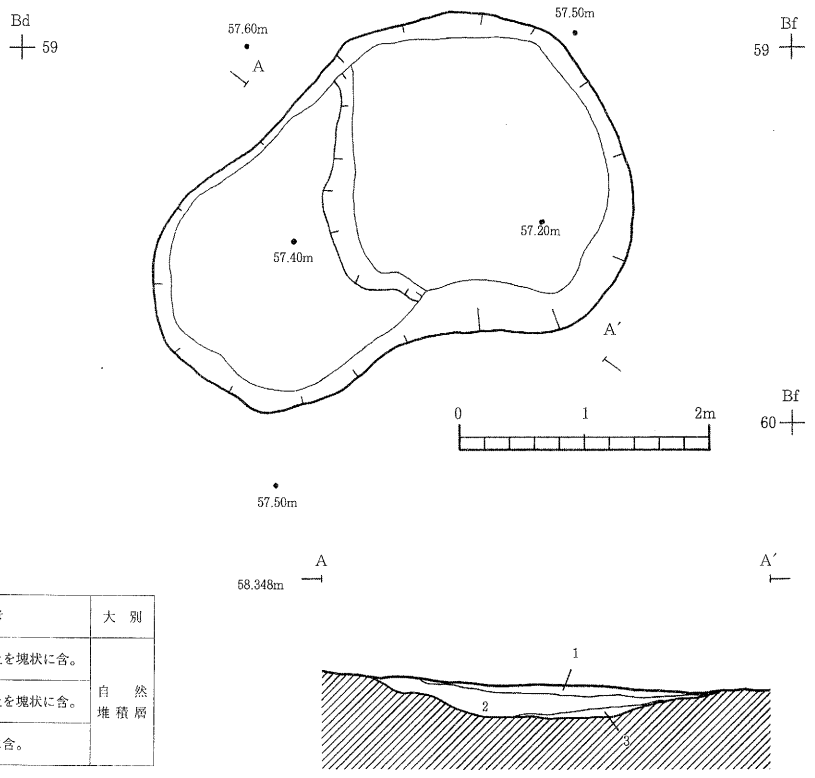
第13図　191号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	褐10YR4/4	シルト	少量の地山土を塊状，灰白色火山灰・炭化物を粒状に含。	自　然堆積層
2	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の地山土を塊状，灰白色火山灰・炭化物を粒状に含。	
3	褐10YR4/4	シルト	少量の灰白色火山灰と炭化物を粒状に含。	

第12表　191号土壙土層註記表

(2) 192号土壙

調査区南部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸3.97m，短軸2.64m，深さ0.32mの規模で，平面形は不整長方形を呈する。底面は南西側が高く北東側が低い二段構造で，双方ともほぼ平坦になっており，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。層№1，層№2，層№3の全てが灰白色火山灰を含んでいる。



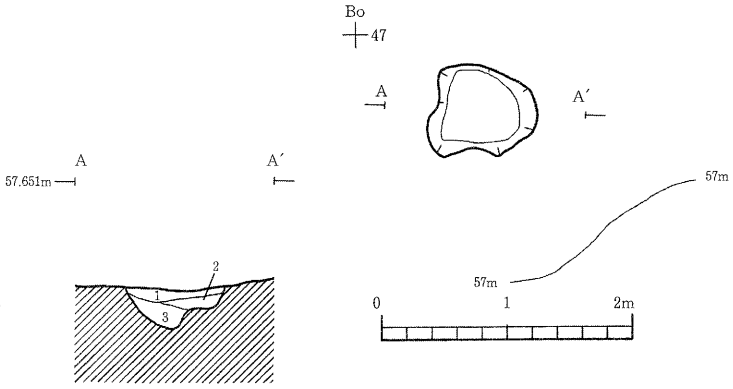
№.	土　色	土　性	備　考	大別
1	暗褐10YR3/3	シルト	少量の灰白色火山灰・地山土を塊状に含。	自然堆積層
2	褐10YR4/4	粘土質シルト	少量の灰白色火山灰・地山土を塊状に含。	
3	にぶい黄褐10YR4/3	砂質粘土	少量の灰白色火山灰を塊状に含。	

第13表　192号土壙土層註記表

第14図　192号土壙

(3) 193号土壙

調査区北東部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸0.80m，短軸0.66m，深さ0.41mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は丸底で，壁は急に立ち上がる。壁面の一部に崩落の痕跡が確認された。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。



№.	土　色	土　性	備　考	大別
1	暗褐10YR3/4	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	褐10YR4/6	シルト		
3	黄褐10YR5/6	シルト質粘土	少量の褐10YR4／6シルト・地山土を塊状に含。	

第14表　193号土壙土層註記表

第15図　193号土壙

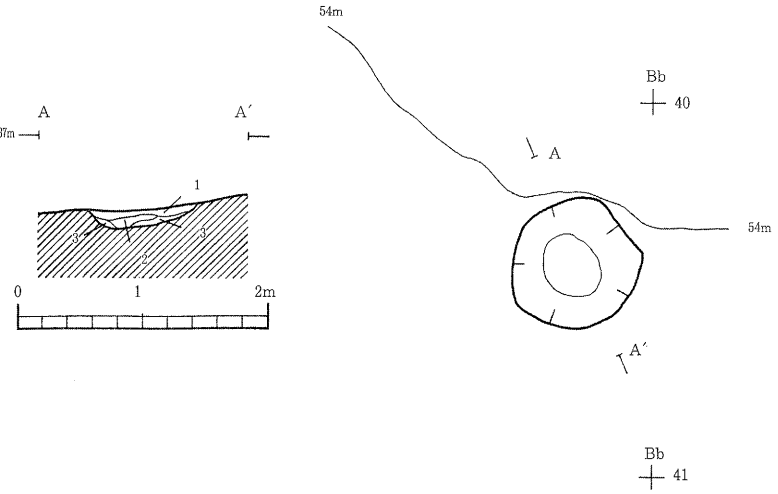
(4) 194号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸1.02m，短軸1.00m，深さ0.24mの規模で，平面形は円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に

細分され，いずれも自然堆積層である。

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒褐10YR3/2	シルト質粘土	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	暗褐10YR3/3	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	
3	黄褐10YR5/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	

第15表　194号土壙土層註記表



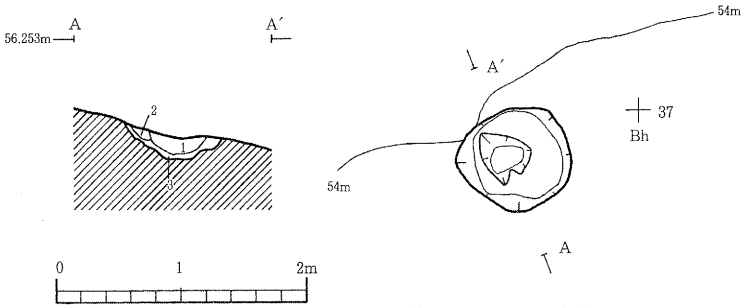
第16図　194号土壙

(5) 195号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸0.84m，短軸0.79m，深さ0.40mの規模で，平面形は不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。壁面の一部に崩落の痕跡が確認された。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黄褐10YR5/6	シルト質粘土	多量の地山土を塊状に含。	自然堆積層
2	黄褐10YR5/8	砂質粘土	少量の地山土を塊状に含。	
3	褐10YR4/6	砂質粘土	少量の地山土を塊状に含。	

第16表　195号土壙土層註記表



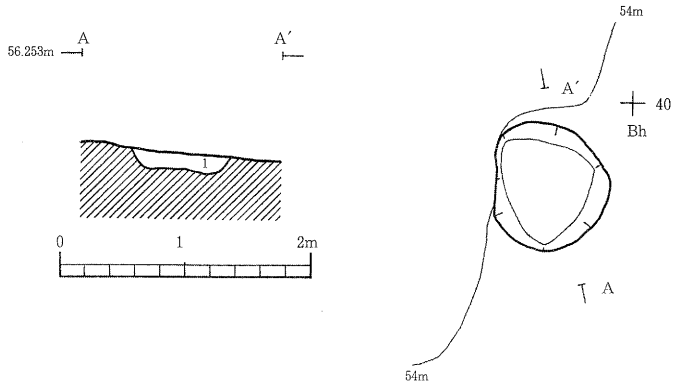
第17図　195号土壙

(6) 196号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸0.98m，短軸0.97m，深さ0.30mの規模で，平面形は不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，自然堆積層である。

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	褐10YR4/6	砂質粘土	10YR5/6黄褐砂質粘土との混合層。	自然堆積層

第17表　196号土壙



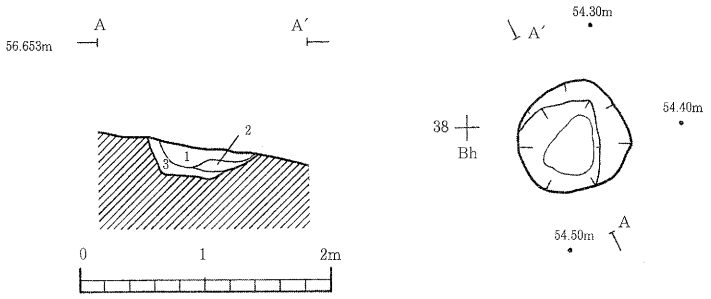
第18図　196号土壙

(7) 197号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒褐10YR2/3	砂質シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	黄褐10YR5/8	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
3	褐10YR4/6	砂質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	

第18表　197号土壙



第19図　197号土壙

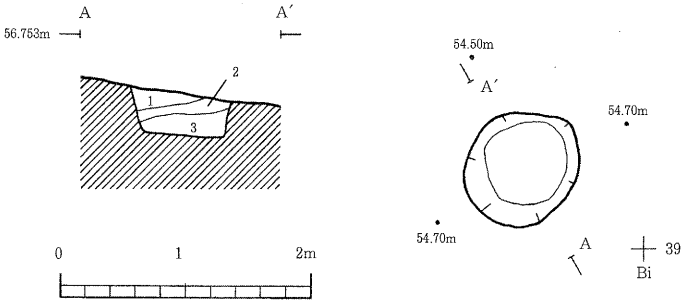
から確認された。重複は認められない。長軸0.88m，短軸0.86m，深さ0.37mの規模で，平面形は円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。

(8) 198号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸0.99m，短軸0.90m，深さ0.43mの規模で，平面形は円形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐10YR4/4	シルト	少量の地山土を塊状に含。	自然堆積層
2	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	少量の地山土を塊状に含。	
3	褐10YR4/6	砂質粘土	少量の地山土を塊状に含。	

第19表　198号土壙土層註記表



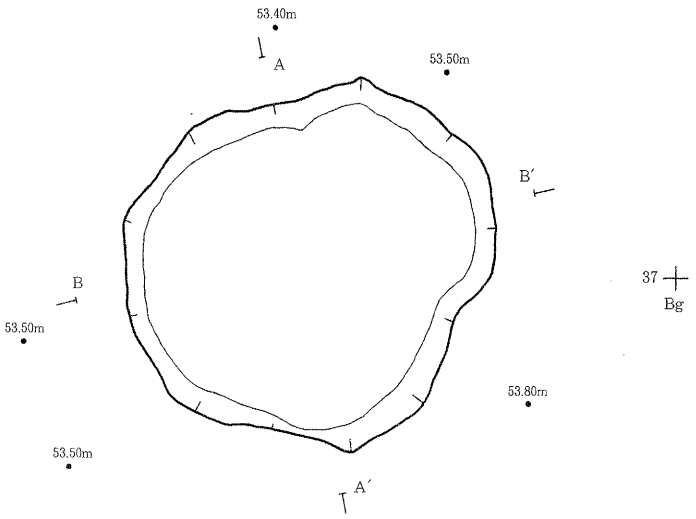
第20図　198号土壙

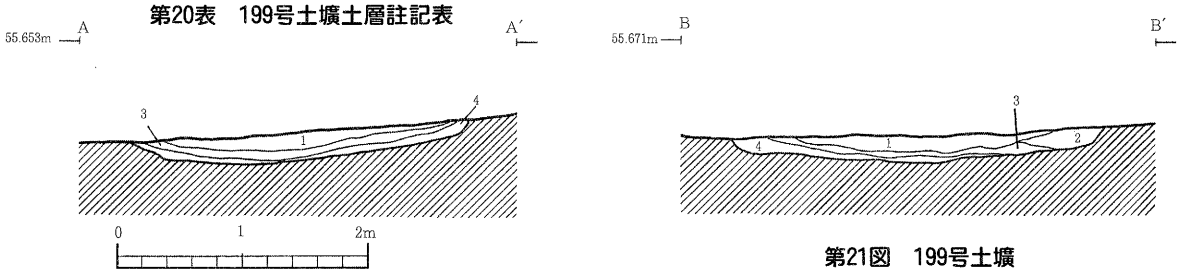
(9) 199号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸3.04m，短軸2.86m，深さ0.33mの規模で，平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は4層に細分され，いずれも自然堆積層である。この中で，層No.1は灰白色火山灰層である。

No.	土色	土性	備考	大別
1	灰白2.5Y7/1	火山灰	少量の地山土を塊状，暗褐10YR 3/4シルトを粒～塊状に含。	火山灰層
2	褐10YR4/6	粘土質シルト	多量の地山土を塊状に含。	自然堆積層
3	にぶい黄褐10YR4/3	シルト質粘土	少量の地山土を塊状に含。	
4	にぶい黄褐10YR5/4	粘土		

第20表　199号土壙土層註記表

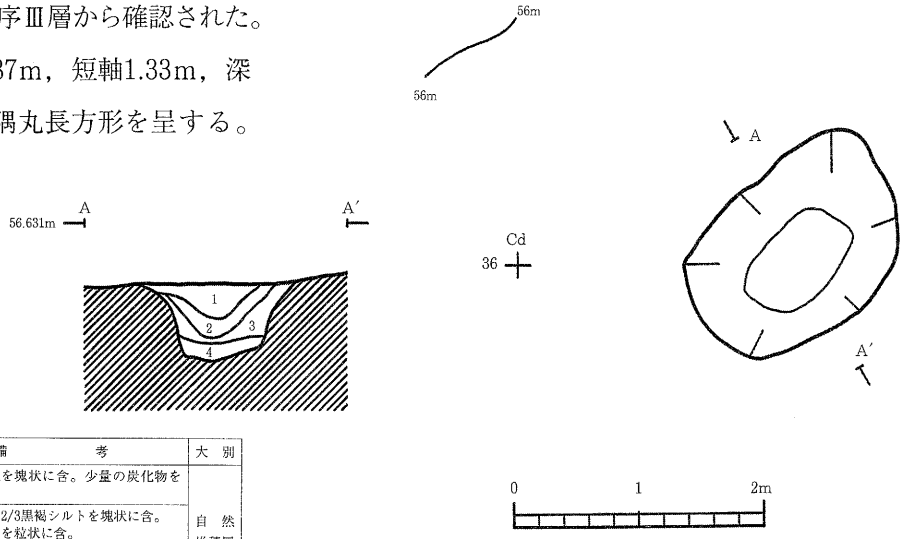




第21図　199号土壙

(10) 200号土壙

調査区北部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸1.87m，短軸1.33m，深さ0.68mの規模で，平面形は隅丸長方形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は4層に細分され，いずれも自然堆積層である。



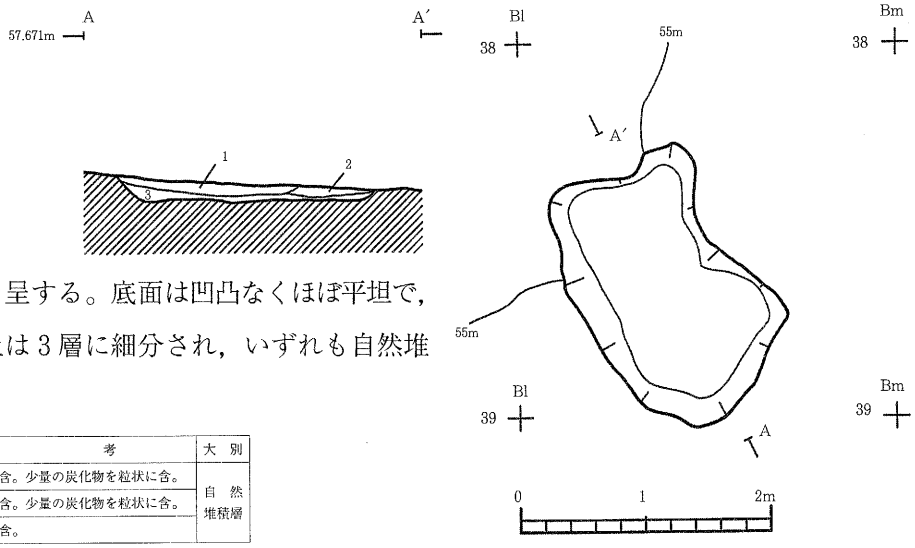
第22図　200号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	黒褐10YR2/3	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	暗褐10YR3/3	粘土質シルト	多量の10YR2/3黒褐シルトを塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	
3	褐7.5YR4/6	粘土質シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
4	にぶい黄褐10YR5/4	粘土		

第21表　200号土壙土層註記表

(11) 201号土壙

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸2.10m，短軸1.25m，深さ0.20mの規模で，平面形は不整長方形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。



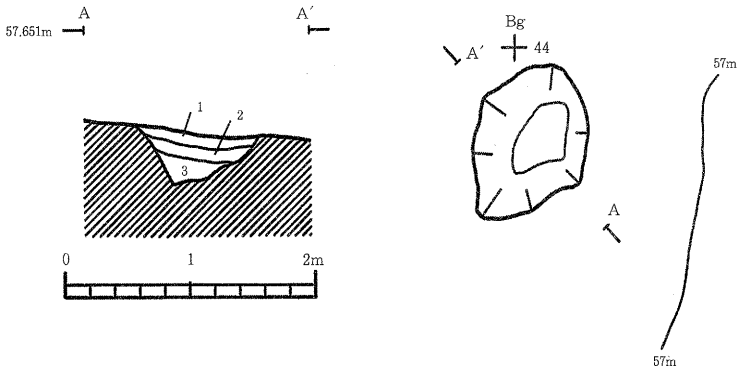
第23図　201号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗褐10YR3/3	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	暗褐10YR3/4	シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	
3	褐7.5YR4/6	砂質粘土	少量の地山土を塊状に含。	

第22表　201号土壙土層註記表

(12) 202号土壙

調査区北東部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸1.02m，短軸0.95m，深さ0.46mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は丸底で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。この中で，層No.1は灰白色火山灰を含んでいる。



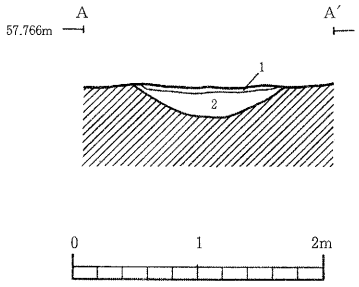
第24図　202号土壙

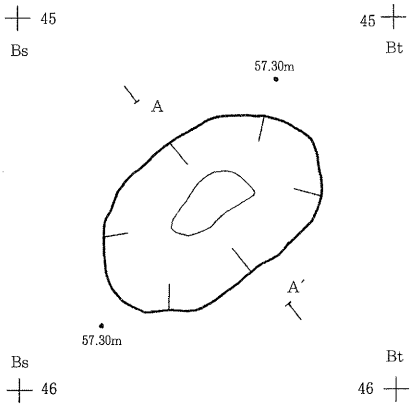
No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	にぶい黄橙10YR6/4	砂質シルト	多量の地山土を塊状に含。少量の灰白色火山灰を塊状，炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	黄褐10YR5/8	シルト	少量の地山土を塊状，炭化物を粒状に含。	
3	黄褐10YR5/6	シルト質粘土	少量の地山土を塊状に含。	

第23表　202号土壙土層註記表

⑬ 203号土壙

調査区北東部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸1.98m，短軸1.21m，深さ0.27mの規模で，平面形は楕円形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は2層に細分され，いずれも自然堆積層である。層No.1，層No.2とも灰白色火山灰を含んでいる。





第25図　203号土壙

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	にぶい黄褐10YR4/3	シルト	多量の灰白色火山灰を塊状に含。少量の地山土・炭化物を粒状に含。	自然堆積層
2	黄褐10YR5/8	シルト	少量の灰白色火山灰を塊状，炭化物を粒状に含。	

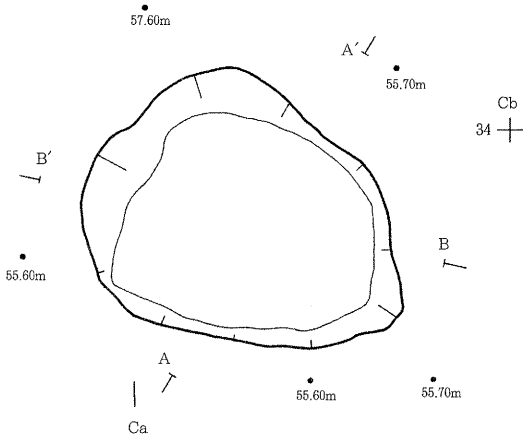
第24表　203号土壙土層註記表

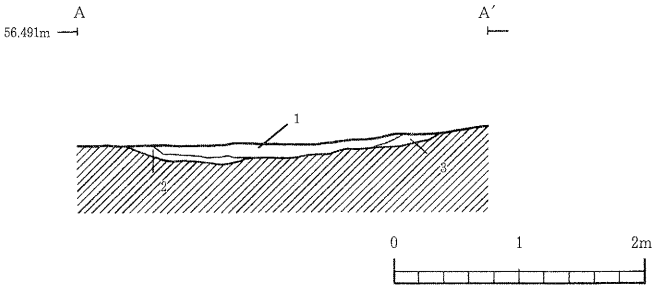
⑭ 204号土壙

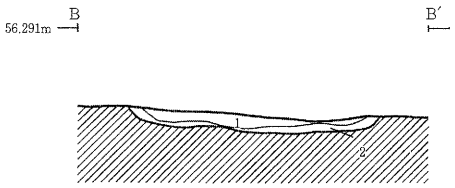
調査区北部平坦面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸2.70m，短軸2.02m，深さ0.28mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗褐10YR3/3	シルト質粘土	多量の地山土を塊状に含。	自然堆積層
2	黄褐10YR5/8	粘土	少量の地山土を塊状に含。	
3	暗褐10YR3/4	粘土	少量の地山土を塊状，地山土を粒状に含。	

第25表　204号土壙土層註記表





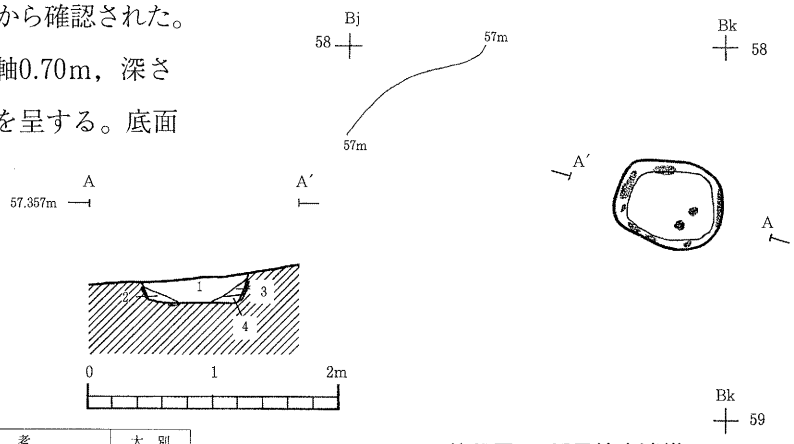


第26図　204号土壙

6．焼土遺構

(1) 105号焼土遺構

調査区南東端緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸0.85m，短軸0.70m，深さ0.24mの規模で，平面形は隅丸長方形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分される。自然堆積層と壁崩落土からなる。底面と壁の一部が強い火熱を受け，赤変していた。



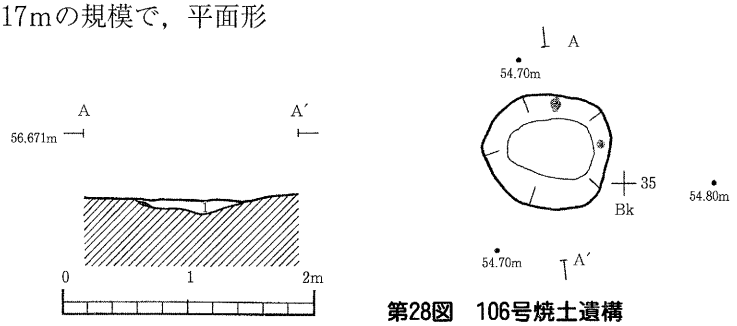
第27図　105号焼土遺構

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗褐10YR3/3	シルト	少量の炭化物・地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層
2	褐7.5YR4/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	壁崩落土
3	黒10YR2/1	シルト	多量の炭化物を粒～塊状，少量の焼土・地山土を粒状に含。	炭化物層

第26表　105号焼土遺構土層註記表

(2) 106号焼土遺構

調査区北西部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸1.00m，短軸0.91m，深さ0.17mの規模で，平面形は円形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，自然堆積層である。底面と壁の一部が強い火熱を受け，赤変していた。



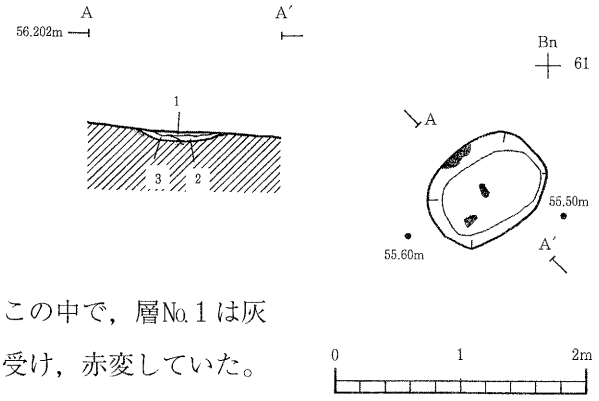
第28図　106号焼土遺構

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	暗褐10YR3/3	シルト	少量の地山土・焼土を塊状に含。	自然堆積層

第27表　106号焼土遺構土層註記表

(3) 107号焼土遺構

調査区南東端緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸0.98m，短軸0.75m，深さ0.14mの規模で，平面形は隅丸長方形を呈する。底面は凹凸なくほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分され，いずれも自然堆積層である。この中で，層No.1は灰白色火山灰を含んでいる。底面と壁の一部が強い火熱を受け，赤変していた。



第29図　107号焼土遺構

No.	土　色	土　性	備　考	大　別
1	にぶい黄褐10YR5/4	シルト	多量の地山土を塊状，灰白色火山灰を粒状に含。少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
2	褐10YR4/4	シルト	多量の炭化物を粒状に含。少量の地山を塊状に含。	
3	灰黄褐10YR5/2	シルト	多量の炭化物を塊状含。	

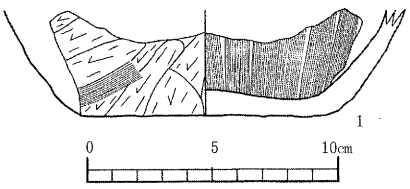
第28表　107号焼土遺構土層註記表

7．その他

以上の遺構と遺物の中に，旧石器の試掘トレンチを２本設定した（第２図「遺構配置図」参照）。遺物は出土しなかった。また，調査区から，土師器甕が１点表面採取された。

No.	種　別	層　位	外　　面	底　部	内面	口径・底径・器高（cm）	備　考
1	土師器杯	表　採	ヘラケズリ，ナデ	―――	ナデ	－・9．8・－	図版10－4

第29表　表採土器観察表



第30図　表採土器

Ⅴ．考察とまとめ

今回の調査では古代の遺物が出土した。量的に少ないため，検出された遺構の検討と併せて記していく。

(1)住居跡

住居跡は１軒検出された。平面形は長方形を呈し，カマドは北西壁中央部をかまぼこ状に抉って設けている。側壁部にあたるカマド構築土は確認されていない。同様な形態のカマドを設けた住居跡は，少数であるが県内に存在する。志波姫町御駒堂遺跡第13・第15・第27・第30・第35・第40・第42住居跡，同宇南遺跡第１・第４・第５住居跡，同山ノ上遺跡第１住居跡，古川市宮沢遺跡愛宕山地区第２住居跡，利府町大沢窯跡Ａ１号住居跡，仙台市南小泉遺跡ＳＩ18・ＳＩ20ｂ，河南町代官山遺跡１号住居跡などである。８～９世紀代の年代が与えられる住居跡が大半を占め，宮城県北部に多く見受けられる。この形態のカマドを有する住居跡は関東地方からの移民集落にも見受けられるが，54号住居跡の場合，この点は不明である。また，本遺構の特徴として，カマドの設置形態の外に柱穴の配置が挙げられる。柱穴は主柱穴・側柱穴合わせて12個あるが，全て周溝沿いに設けていた点である。壁をかまぼこ状に抉って設けたカマド，全て周溝沿いに設けた柱穴，平坦な床面ということから，床面を平面として極力有効に且つ広く使用したいという意図があったものと考えられる。貯蔵穴状ピットが確認されなかった点については，住居の使用期間，床面を平面として極力有効且つ広く使用することなどに比べて優先順位が低かったことが考えられる。また，堆積土の中程に十和田ａ火山灰層（層No.４）があり，54号住居跡はこれよりも古い年代と考えられる。

遺物は土師器坏・甕が出土した。坏は非ロクロ使用１点の出土である。外面にヨコナデとミガキまたは削り，内面にミガキとナデの調整が部分的に施されているがいずれも軽微で，取り急ぎ作られたように見受けられる。甕は６点出土した。２点出土した長胴甕は，外面がハケメ調整とヘラ削り調整のもの（内面はいずれもナデまたはヘラナデ調整）が各１点ずつである。ハケメ調整のものは体部中央付近が最も膨らみ口縁部が外反し，口縁部と体部の境に段を有する。ヘラ削り調整のものは体部中央付近がやや膨らみ口縁部が外反する型のもので，名取市清水遺跡第Ⅲ群土器～第Ⅳ群土器，志波姫町御駒堂遺跡第１群土器，河南町関ノ入遺跡16号・17号住居跡など多くの遺跡に類例が求められる。河南町関ノ入遺跡16号・17号住居跡のものよりは１段階ほど古いと考えられ，住社式から栗囲式にかけての年代観が与えられる。１点出土し

た小型長胴甕は，底径が小さく体部下半で外湾し口縁部に近い部分が最も膨らむ型のもので，名取市清水遺跡第Ⅳ群土器，矢本町赤井遺跡などに類例が求められる。栗囲式の年代観が与えられる。同じく１点出土した大型の壺型甕は口縁部から体部の一部が残存し，口縁部と体部の境に段を有する。同様の土師器甕は，角田市住社遺跡，同角田郡山遺跡などに求められる。年代観としては，住社式から栗囲式の年代が求められる。外に土師器甕の破片が２個体分出土した。１個は体部下半から底部にかけての長胴甕の破片で，器面調整は外面：削り，内面：ナデである。栗囲式のものと推定される。もう１個は壺型甕の体部の破片で，器面調整は外面：タタキ→削り，内面：抑え目→ナデである。時期は不明である。いずれも粗雑なつくりで，間に合わせとして作られたように見受けられるため，実年代より少し古く感じ取られる観がある。

以上，出土遺物の年代観や遺物の出土状況などを考慮すると，今回検出された54号住居跡は，７世紀代の年代が与えられる。

⑵粘土採掘坑跡

粘土採掘坑跡は１基検出された。地山を掘削した露天掘り型で，壁及び底面に粘土層がある。堆積土の中程には，十和田ａ火山灰層がある。壁及び底面を構成する粘土は３層に分かれる。最も上に位置する粘土は基本層序Ⅳ層のシルト質粘土で，壁の一部を構成する。鉄分が多く細砂を含む。乾燥すると硬くなるが，比較的水に溶けやすい。中間に位置する粘土は基本層序Ⅴ層の粘土で，壁及び底面の一部を構成する。鉄分をやや多く含む。乾燥すると硬くなり，主体となるシルト質粘土はやや水に溶けにくく，斑状に含む粘土は水に溶けにくい。最も下に位置する粘土は基本層序Ⅵ層の粘土で，底面の一部を構成する。乾燥すると非常に硬くなり，水に溶けにくい。また，以前本遺跡で出土した土器の胎土を見ると，坏類と甕類では含む土質が多少異なることが分かる。本遺構では，異なる３種類の粘土層があり全て使用したと考えられることから，実際に使用する際には器種によって混合比率を変えながら製作した可能性が考えられる。

関ノ入遺跡の粘土採掘坑跡は，今回の露天掘り型（第４集で「土取り状に掘られた」と記したもの：２・３４・６～49号）と，トンネル状に掘削したもの（１・５号）の２種類がある。前者は遺構数が多いものの比較的小規模なものが多数を占め，後者は遺構数が少ないものの比較的大規模なものである。また，水簸坑跡と考えられる土壙の中にも，原材料としての粘土を採掘したと考えられるものがある。このような中で，今回の粘土採掘坑跡は，露天掘り型としては４号・６号粘土採掘坑跡に次ぐ規模で，比較的大きな部類に入る。近接した箇所に外の粘土採掘坑跡が確認されなかったこと，近接する44号溝状遺構に土塁または築地の伴うことが確認できなかったこと，本遺構と44号溝状遺構の確認面に粘土が露出していること，比較的近接した箇所に27号～29号窯跡があることなどを含め，今回の粘土採掘坑跡の持つ意味を考えたい。

⑶溝状遺構

溝状遺構は２条検出された。44号溝状遺構は古代の大溝である。堆積土の中程に十和田ａ火山灰層を含む。本遺構は，その北側にある平場を区画するように設けられた溝の一部と推定される。平場を区画する溝は，平場の南側に２条，西側に１条ある。調査区外にある南側と西側の各１条ずつには土塁または築地が伴っている。平場は長者館跡の一部と考えられるが，今回検出された44号溝状遺構が平場に伴うもので

あるとすれば，長者館跡は従来言い伝えられてきた金売吉次の伝説より250年以上前のものとなる。また，本遺構は，北東側では確認面から底面までのレベル差が大きく北側では小さくなっている。自然の削平を受けた可能性もあるが，東北地方に城柵官衙の築かれた年代の遺構としては，北側の確認面と底面のレベル差が小さい点は防禦機能の弱い感がある。そこで，本遺構の主目的は，空間の区画であると考えられる。そのことを含め，平場と平場を区画する外の２条の溝との関係の解明が，今後の課題である。

また，今回検出された規模の溝状遺構には，土塁または築地が伴う場合もあるが，本遺構には伴わなかった。１号小溝状遺構や45号溝状遺構,200号土壙などの使用により破壊された可能性もあるが，基本層中あるいは近接する遺構堆積土中に痕跡は確認できなかった。検出状況からすると，土塁または築地が伴っていた可能性は低いと考えられる。これも44号溝状遺構の性格を考える上で，傍証になるものと思われる。

遺物は，内外面ロクロナデ・底部回転糸切りの須恵器坏１点が出土した。本遺構が使用された年代としては９世紀代が考えられるが，出土遺物が極めて少ないため，より年代を特定することはできなかった。

45号溝状遺構は，遺構の規模，検出状況などから小溝状遺構(畑)の一部とも考えられたが，近接する１号小溝状遺構とは７ｍの距離があること，１条だけであることなどから,小溝状遺構とは確認できなかった。

⑷小溝状遺構

小溝状遺構は３基検出された。いずれも畝状に堆積した土の上半分が削平されたような状況で確認された。いずれも底面は概ね平坦であるが，所々に円筒形及び不整形の窪みまたは小穴が見受けられた。全て畑跡と考えられる。１号小溝状遺構は８条，２号小溝状遺構は５条，３号小溝状遺構は４条の小溝からなる。小溝の間隔は，１号小溝状遺構10～40㎝，２号小溝状遺構20～50㎝，３号小溝状遺構10～45㎝である。

この中で，２号小溝状遺構は，堆積土中に二次堆積と推定される少量の灰白色火山灰と表杉ノ入式の土師器片１点を含み，平安時代中期以降の畑跡の可能性がある。３号小溝状遺構も多量の灰白色火山灰を層中に含み，平安時代中期以降の畑跡の可能性がある。

県内で同様の遺構が検出された遺跡としては，仙台市山口遺跡，同下ノ内遺跡，同下ノ内浦遺跡，同六反田遺跡，同柳生台畑遺跡，同南小泉遺跡，同中在家南遺跡，同中田畑中遺跡，同後河原遺跡，同中田南遺跡，同四郎丸館跡，同大野田古墳群，同富沢遺跡，同神柵遺跡，同沼向遺跡，同中野高柳遺跡，同洞ノ口遺跡，多賀城市山王遺跡，同新田遺跡，石巻市田道町遺跡，三本木町舟場遺跡などがある。これらの遺跡では，小溝のみが検出されたところと畝と組み合わせになって検出されたところがある。また，昭和63年度に河南町関ノ入遺跡３号窯跡灰原最下層直下から検出された６号～９号溝状遺構(詳細未報告。位置のみ『河南町文化財調査報告書』第４集第４図の関ノ入遺跡遺構配置図にあり)は,ほぼ均等な間隔で４条の小溝が並び，形態も似通っており同様の遺構である可能性がある。

１号小溝状遺構の西側には，連続して更に２条の小溝がある(図版６－２参照)。しかし，これらの小溝堆積土にはビニール片が含まれており，上部からの部分的な撹乱も確認されず比較的均質な堆積土であることから，現代のものと判断して割愛した。連続して並んでいるため，１号小溝状遺構も現代のものである可能性があったが，判断すべき材料が乏しいため，本報告書に記載した。

⑸土壙

土壙は14基検出された。199号土壙は十和田ａ火山灰と推定される灰白色火山灰層を有し,191号・192号・202号・203号土壙は,堆積土中に十和田ａ火山灰と推定される灰白色火山灰を含む。全て二次堆積と推定される。以上５基の土壙は，十和田ａ火山灰降下以前の平安時代のものと考えられる。外の全ての土壙は不整形のものが多く,粘土採掘坑跡の可能性を考えたものもあるが,性格・用途及び時期ともに不明である。

⑹焼土遺構

焼土遺構は３基検出された。いずれも小規模なもので，105号・106号は用途及び時期は不明である。107号焼土遺構は,堆積土中に十和田ａ火山灰と推定される灰白色火山灰を含む。二次堆積と推定される。

⑺その他

土師器甕１点が表面採集された。外面ヘラ削り調整のもので，体部下半部の一部しか残存していなかったため，時期は不明である。

また，平成８年３月に関ノ入遺跡の比較的近接した箇所から中期旧石器が発見されたことから，旧石器を探すためのトレンチを２箇所設けたが，沢の埋没箇所である斜面に当り，後期旧石器時代以前の遺構及び旧石器は確認できなかった。この斜面を登った上の平場は調査区外の畑と推定される。畑の上部には，中期旧石器が発見された層理面直下の層が確認されている。

まとめ

今回の発掘調査により，以下のことが分かった。

⑴　関ノ入遺跡は旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世に，長者館跡は縄文・平安・中世にわたる複合遺跡である。

⑵　７世紀代の住居跡が検出され，空白であった古墳時代後期の資料が新たに加わった。

⑶　須恵器生産に係わると推定される粘土採掘坑跡が検出された。

⑷　今回検出した44号溝状遺構は９世紀代のもので，長者館跡の金売吉次伝説と年代的に合致しない。

⑸　９世紀代と推定される小溝状遺構が検出され，当時の農耕の一端が分かった。

引用・参考文献(五十音順)

相沢清利・千葉孝弥(1989.3):「年報3　新田遺跡第7次」『多賀城市文化財調査報告書』第20集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

相沢清利(1994.3):「多賀城市埋蔵文化財調査センター年報第7号　新田遺跡第13次調査」多賀城市埋蔵文化財調査センター

赤澤靖章(1990.3):「山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報－」『宮城県文化財調査報告書』第138集　宮城県教育委員会・多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局

阿部博志・須田良平(1997.3):「北上川下流域における旧石器時代遺跡の分布調査」『東北歴史資料館資料集』40　東北歴史資料館

五十嵐康洋(1995.3):「南小泉遺跡　第25次調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第196集　仙台市教育委員会

五十嵐康洋(1998.3):「南小泉遺跡　第26次調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第225集　仙台市教育委員会

石井武政・柳沢幸夫ほか(1982.2):「松島地域の地質」『地域地質研究報告』秋田6第89号　通商産業省工業技術院地質調査所

石川俊英・石本敬(1989.3):「年報3　新田遺跡第8・9次」『多賀城市文化財調査報告書』第20集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

伊東信雄(1957.3):「古代史」『宮城県史』第1巻　宮城県

太田昭夫(1994.3):「仙台市中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－」『仙台市文化財調査報告書』第182集　仙台市教育委員会

小山正忠・竹原秀雄(1990.6):『新版標準土色帖』10版　日本色研事業株式会社

河南町(1971.3):「風土記御用書上」『河南町誌』下　河南町

神成浩志・斎野裕彦(1995.3):「下ノ内浦遺跡－第5次発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第202集　仙台市教育委員会

木村浩二・川名秀一(1992.3):「神柵遺跡－発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第159集　仙台市教育委員会

工藤信一郎・渡部紀(1998.3):「南小泉遺跡　第30・31次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第226集　仙台市教育委員会

工藤哲司(1988.3):「富沢遺跡　24次調査　富沢中学校地区発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第113集　仙台市教育委員会

工藤哲司(1996.12):「中在家南遺跡他　仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第213集　仙台市教育委員会

小井川和夫・小川淳一ほか(1982.3):「東北自動車道調査報告書Ⅵ　4．御駒堂遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第83集　宮城県教育委員会

齋藤彰裕(1997.3):「住社遺跡」『角田市文化財調査報告書』第19集　角田市教育委員会

齋藤彰裕(1999.3):「角田郡山遺跡Ⅶ」『角田市文化財調査報告書』第23集　角田市教育委員会

斎野裕彦(1994.10):「南小泉遺跡　第22次・23次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第192集　仙台市教育委員会

佐久間光平(1997.3):「舟場遺跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第173集　宮城県教育委員会

佐藤甲二・渡辺誠(1985.3):「中田畑中遺跡－第2次発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第78集　仙台市教育委員会

佐藤甲二・中富洋(1991.3):「山口遺跡　第9次・10次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第151集　仙台市教育委員会

佐藤甲二・(1997.11):「畠跡の畝間と耕作痕について－仙台市域の事例から－」『第7回東日本の水田を考える会－資料集－』

東日本の水田を考える会
佐藤淳(1998.3):「柳生台畑遺跡－(仮称)柳生小学校建設関係発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第230集
仙台市教育委員会
佐藤敏幸(1991.3):「御塩蔵場跡－発掘調査報告書－」『河南町文化財調査報告書』第5集　河南町教育委員会・建設省
東北地方建設局
佐藤敏幸(1993.3):「須江窯跡群　代官山遺跡」『河南町文化財調査報告書』第6集　河南町教育委員会
佐藤敏幸(1993.3):「須江窯跡群　関ノ入遺跡－陸奥海道地方最大の須恵器生産地－」『河南町文化財調査報告書』第7集
河南町教育委員会
佐藤敏幸(1995.3):「赤井遺跡－牡鹿柵・郡衙擬定地－」『矢本町文化財調査報告書』第3集　矢本町教育委員会
佐藤敏幸(1999.3):「赤井遺跡－牡鹿柵・郡家擬定地－」『矢本町文化財調査報告書』第10集　矢本町教育委員会
佐藤則之・佐藤憲幸(1997.3):「山王遺跡Ⅴ－第1分冊(八幡地区)－」『宮城県文化財調査報告書』第174集　宮城県
教育委員会・建設省東北地方建設局
佐藤洋(1987.3):「南小泉遺跡　第14次発掘調査報告書」『仙台市文化財報告書』第109集　仙台市教育委員会
佐藤洋・渡部紀(1987.3):「六反田遺跡Ⅲ　名取川下流域の縄文時代後期・律令時代集落跡」『仙台市文化財調査報告書』
第102集　仙台市教育委員会・日本電信電話株式会社東北総支社
佐藤洋(1990.3):「南小泉遺跡　第16～18次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第140集　仙台市教育委員会
佐藤雄一(1986.11):「6板碑」『わがまち河南の文化財』河南町教育委員会
佐藤雄一(1997.8):「河南町の板碑」『平成9年度河南町歴史大学』レジュメ　河南町教育委員会
篠原信彦(1990.3):「下ノ内遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ－」『仙台市文化財調査報告書』第136集
仙台市教育委員会
志間泰治・桑月鮮(1991.11):『宝ケ峯』斎藤報恩会
清水東四郎(1924.12):「中山柵跡(佳景山)(桃生郡史跡)」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』2
主浜光朗(1990.3):「大野田古墳群－発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第138集　仙台市教育委員会
菅原弘樹(1995.3):「山王遺跡Ⅱ－多賀前地区遺構編－」『宮城県文化財調査報告書』第167集
宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局
鈴木省三(1924.12):「中山柵」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』1
高橋守克・阿部恵(1987.3):「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集　河南町教育委員会
滝口卓(1989.3):「年報3　山王遺跡第7次」『多賀城市文化財調査報告書』第20集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
竹田幸司・渡部弘美(1995.3):「四郎丸館跡　発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第200集　仙台市教育委員会
滝沢文教・神戸信和ほか(1984.3):「石巻地域の地質」『地域地質研究報告』秋田6第90号　通商産業省工業技術院地質調査所
田中則和・主浜光朗(1984.2):「山口遺跡Ⅱ－仙台市体育館建設予定地－」『仙台市文化財調査報告書』第61集
仙台市教育委員会
手塚均(1980.3):「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ　7．山ノ上遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第69集
宮城県教育委員会・日本道路公団
千葉孝弥・鈴木孝行(1997.3):「山王遺跡Ⅰ」『多賀城市文化財調査報告書』第45集　多賀城市教育委員会
・建設省東北地方建設局
中野裕平(1988.3):「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第2集　河南町教育委員会
中野裕平・佐藤敏幸(1990.3):「須江関ノ入遺跡－工業団地造成に伴う発掘調査概報－」『河南町文化財調査報告書』第4集
河南町教育委員会
中野裕平(1993.3):「群田遺跡」『河南町文化財調査報告書』第8集　河南町教育委員会

中野裕平(1994.6):「折損された板碑」『六軒丁中世史研究』第2号　東北学院大学中世史研究会
丹羽茂・阿部恵(1981.3):「東北新幹線関係遺跡調査報告書5・清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第77集
芳賀英実(1995.3):「田道町遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第7集　石巻市教育委員会
平間亮輔・五十嵐康洋(1999.3):「後河原遺跡－第3次・4次発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第236集
仙台市教育委員会
藤沼邦彦・小井川和夫ほか(1989.3):「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25　東北歴史資料館
古川一明・太田肇(1993.3):「日の出山窯跡群－詳細分布調査とC地点西部の発掘調査－」『色麻町文化財調査報告書』第1集
色麻町教育委員会
松本彦七郎(1919.5):「陸前国宝ケ峯遺跡の分層的小発掘成績」『人類学雑誌』34の5
松本彦七郎(1919.9):「宝ケ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9巻第9号　日本考古学会
宮城県教育委員会(1987.3):「硯沢・大沢窯跡ほか　仙台－松島道路建設関係遺跡調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第
116集　宮城県教育委員会・宮城県道路公社
宮城県教育委員会(1998.3):「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第176集　宮城県教育委員会
三宅宗議・進藤秋輝ほか(1987.3):「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集　矢本町教育委員会
村田晃一(1998.3):「山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－」『宮城県文化財調査報告書』第175集
宮城県教育委員会・宮城県土木部
遊佐五郎(1980.3):「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ　9．宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第69集
宮城県教育委員会・日本道路公団
渡部紀(1995.3):「六反田遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅳ－」『仙台市文化財調査報告書』第199集
仙台市教育委員会
(1971):「仙台領内古城書上」『仙台叢書』別巻

(註) 編著者名の記載については，日本国内の図書館における一般的な図書目録の記載方法に従い，同一図書における編著者(または団体)が2人までの場合は氏名(または団体名)全て，3人以上の場合はその図書を代表する2人の氏名のみの記載とし，3人目からは「ほか」の扱いとした。

付編　河南町，関ノ入遺跡の土層とテフラ

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

宮城県域の後期更新世以降に形成された土層の中には，鳴子火山や蔵王火山さらに十和田火山や榛名火山などの噴火に由来するテフラ(火山砕屑物，いわゆる火山灰)が分布している。これらのテフラの中には，理化学的な年代測定をはじめとする多くの手法により噴出年代が明らかにされた示標テフラがある。そして，これらを過去の時間と空間の軸として編年を行う火山灰編年学(テフロクロノロジー)を利用することによって，遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代を知ることができるようになっている。

そこで,関ノ入遺跡の発掘調査の際に作成された土層断面についても，地質調査を行って層序を記載するとともに，テフラの可能性が考えられた試料について火山ガラス比分析と屈折率測定を行って示標テフラの検出同定を行い，土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は,54号住居跡覆土断面および54号住居跡壁の２地点である。

2．土層の層序

（１）54号住居跡覆土断面

８世紀の土器が出土した54号住居跡の覆土は，下位より灰色土(層厚９㎜)，灰白色細粒火山灰層(層厚７㎜)，黒褐色土(層厚18㎝)からなる(図１)。これらのうち，灰白色細粒火山灰層の最上部１㎝は，黄白色に風化している。

（２）54号住居跡壁

54号住居跡の壁では，関ノ入遺跡で表層部の腐植質土壌の下位にある土層の最上部を観察することができた(図２)。この地点では，若干赤味を帯びた褐色土(層厚８㎝以上)の上位に，黄色土ブロック混じり褐色土（層厚32㎝）がみとめられた。

3．火山ガラス比分析

（１）分析試料と分析方法

54号住居跡の壁で認められた土層について，基本的に５㎝ごとに採取された土壌試料のうち，５㎝おき４点について，火山ガラス比分析を行って，示標テフラの検出を試みた。分析の手順は次の通りである。

１）試料15ｇを秤量。
２）超音波洗浄と水洗を繰り返し，泥分を除去。
３）80℃で常温乾燥。
４）分析篩により，1／4-1／8㎜の粒子を篩別。
５）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し，火山ガラスの形態比率を求める。

（２）分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図３に，またその内訳を表１に示す。全体として含まれる火山ガラスの比率は非常に小さい。それでも,試料番号８には，ごくわずかに透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが認められた(0.4%)。また,試料番号６にも，ごくわずかに淡褐色のバブル型ガラスが認められた(0.4%)。さらに，試料番号２には透明なバブル型ガラス(0.8%)のほか,分厚い中間型ガラス(0.4%)も認められた。これらのうち，試料番号８や６に含まれてい

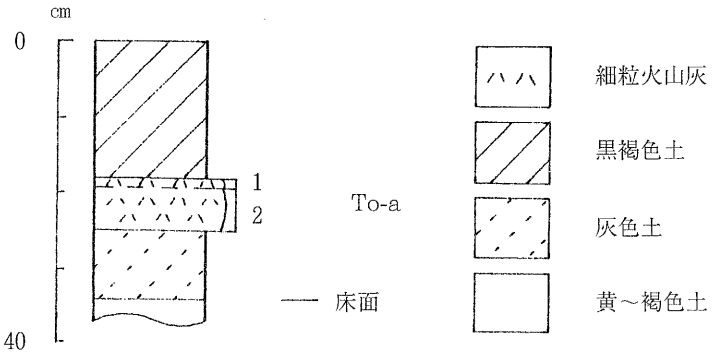


図１　54号住居跡覆土の土層柱状図
数字はテラフ分析の資料番号

る透明のバブル型ガラスについては，その特徴から約2.4～2.5万年前に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT,町田・新井,1976,1992，松本ほか，1987，池田)に由来する可能性が考えられる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

54号住居跡覆土中に認められた細粒火山灰層(試料番号2)と54号住居跡壁の試料番号2について屈折率測定を行い，示標テフラとの同定精度の向上を図った。測定は位相差法(新井,1972)による。

（2）測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。層相からいわゆる灰白火山灰に対比される54号住居跡覆土断面の試料番号2には，透明あるいは白色の軽石型火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの最大径は,0.5㎜である。火山ガラスの屈折率(n)は，1.502-1.509(modal range:1.505-1.508)である。重鉱物としては,斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は,1.707±である。このテフラは,その特徴から，915年に十和田火山から噴火したと考えられている十和田a火山灰(To－a,1大池,1972)に同定される。したがって,54号住居跡の年代は915年以前で,検出された土器の年代と矛盾しない。

なお，火山ガラスの屈折率(n)は，町田・新井(1992)に記載されているTo－aの火山ガラスの屈折率(1.496-1.504)と比較して明らかに高い。この傾向は,宮城県域の同テフラに共通して認められる(古環境研究所，未公表資料)。この理由については,To－aの噴出年代が新しいために,カタログに記載された給源火山に近い標式地における火山ガラスの水和が十分に進んでおらず，火山ガラスの屈折率が遠方に比較して低い状態になっていることが考えられる(新井房夫群馬大学名誉教授談)。

54号住居跡壁の試料番号2には，重鉱物として，角閃石や斜方輝石が含まれている。斜方輝石(γ)と角閃石(n2)の屈折率は，各々1.706-1.712 および1.670-1.675 である。これらの屈折率から，本試料には，約1.2～1.3万年前に十和田火山から噴火した十和田八戸テフラ(To－Hp，早川,1983，町田・新井,1992)に由来するテフラ粒子が混在している可能性が考えられる。なお，斜方輝石については，約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴火した浅間板鼻黄色軽石(As－Yp，新井,1962,町田・新井,1992,小岩・早田,1994)に由来する可能性も指摘されよう。より精度の高い同定を行うためには，さらに土層が厚く堆積した地点での調査分析が必要と思われる。

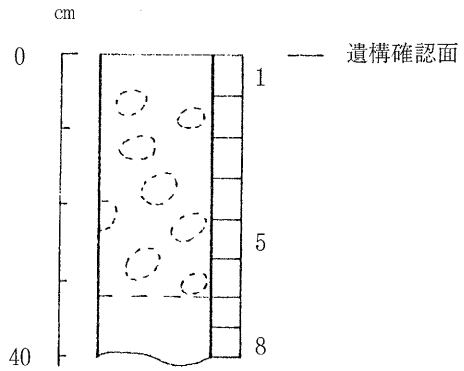


図2　54号壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

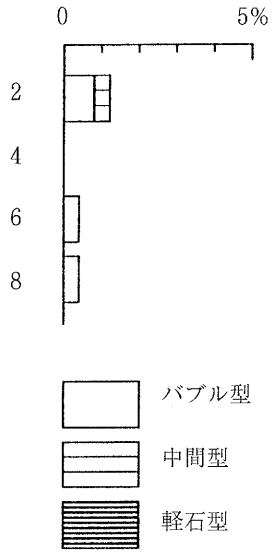


図3　54号壁の火山ガラス
比ダイヤグラム

5．小結

関ノ入遺跡において地質調査を行うとともに,火山ガラス比分析と屈折率測定を行った。その結果，54号住居跡覆土中に,915年に十和田火山から噴出した十和田a火山灰(To－a)が検出された。したがって54号住居跡の年代は915年より古く,土器から推定されている遺構の年代と矛盾しないことが明らかになった。また，54号住居跡の基盤にあたる土層からは，姶良Tn火山灰(AT,約2.4～2.5万年前)，浅間板鼻黄色軽石(As－Yp,約1.3～1.4万年前)，十和田八戸テフラ(TO－Hp，約1.2～1.3万年前）などに由来する可能性のあるテフラ粒子が検出された。

文献

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11,p.254-269.

早川由紀夫(1983)火山豆石として降下堆積した十和田八戸火山灰．火山,28,p.25-40.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流　中の炭化樹木の加速器14Ｃ年代．第四紀研究,34,P.377-379.

小岩直人・早田　勉(1994)東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ．地学雑誌,103,p.68-76.

町田　洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義－．科学,46,p.339-347.

町田　洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス．東京大学出版会,276p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広(1981)日本海を渡ってきたテフラ．科学,51,p.562-569.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史郎(1987)姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）の14Ｃ年代．第四紀研究，26，ｐ.79-83.

表１　関ノ入遺跡における火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw	md	pm	その他	合計
54号住居跡壁	2	2	1	0	247	250
	4	0	0	0	250	250
	6	1	0	0	249	250
	8	1	0	0	249	250

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，数字は粒子数.

表２　関ノ入遺跡における屈折率測定結果

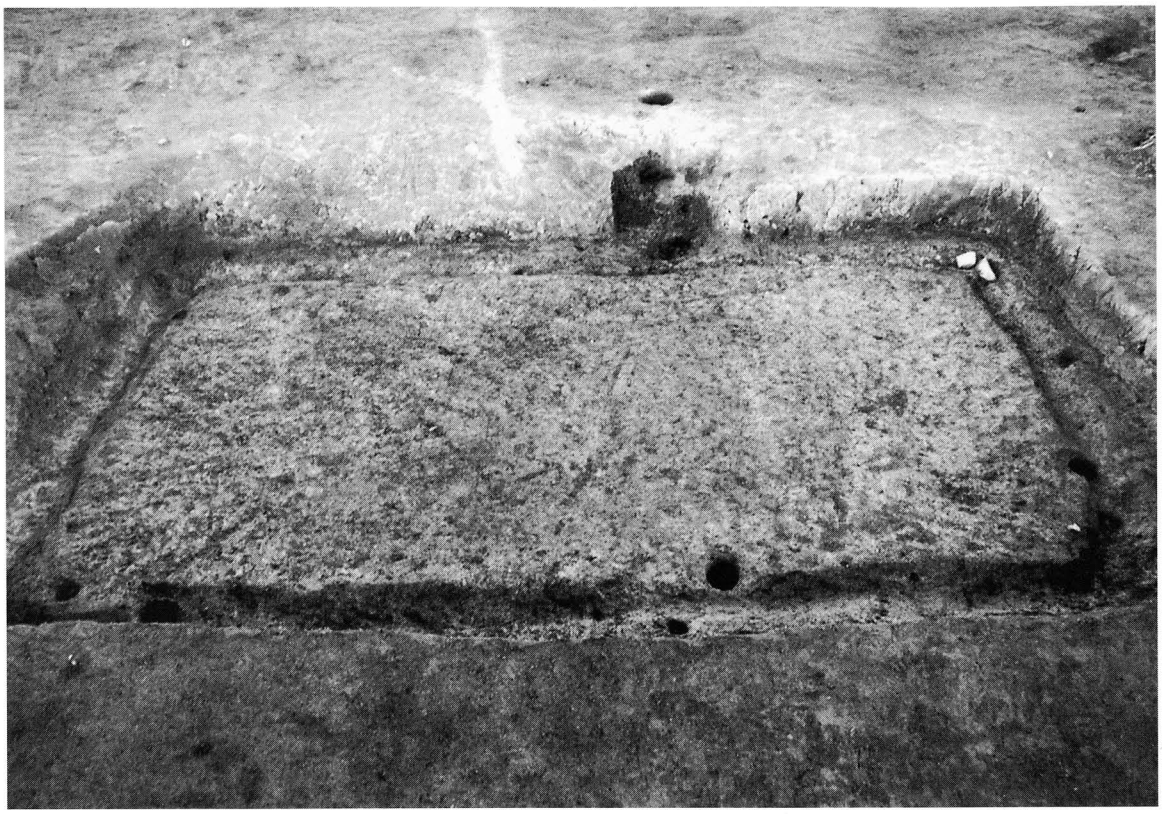
遺構	試料	火山ガラス			重鉱物	
		量	形態	屈折率(n)	組織	屈折率
54住	2	＋＋＋	bw,pm	1.502-1.509 (1.505-1.508)	(opx,cpx)	opx(γ):1.707±
54住壁	2	－	－	－	ho＞opx	opx(γ):1.706-1.712 ho(n_2):1.670-1.675

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋多い，＋＋中程度，＋少ない，－認められない.
bw：バブル型，pm：軽石型．opx：単斜輝石，oh：角閃石.
屈折率の測定は，位層差法（新井,1972）による.

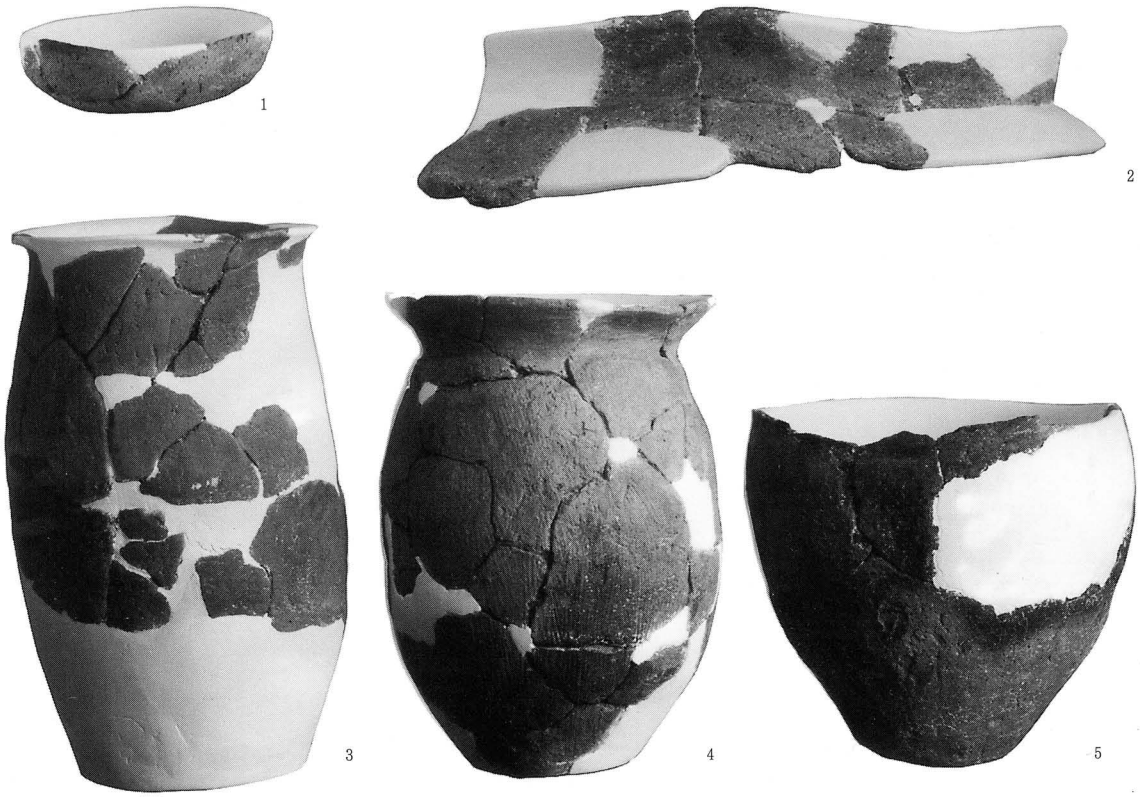
写　真　図　版

図版１－１　調査区全景

図版１－２　調査区全景



図版２－１　54号住居跡完掘状況



図版２－２　54号住居跡出土遺物

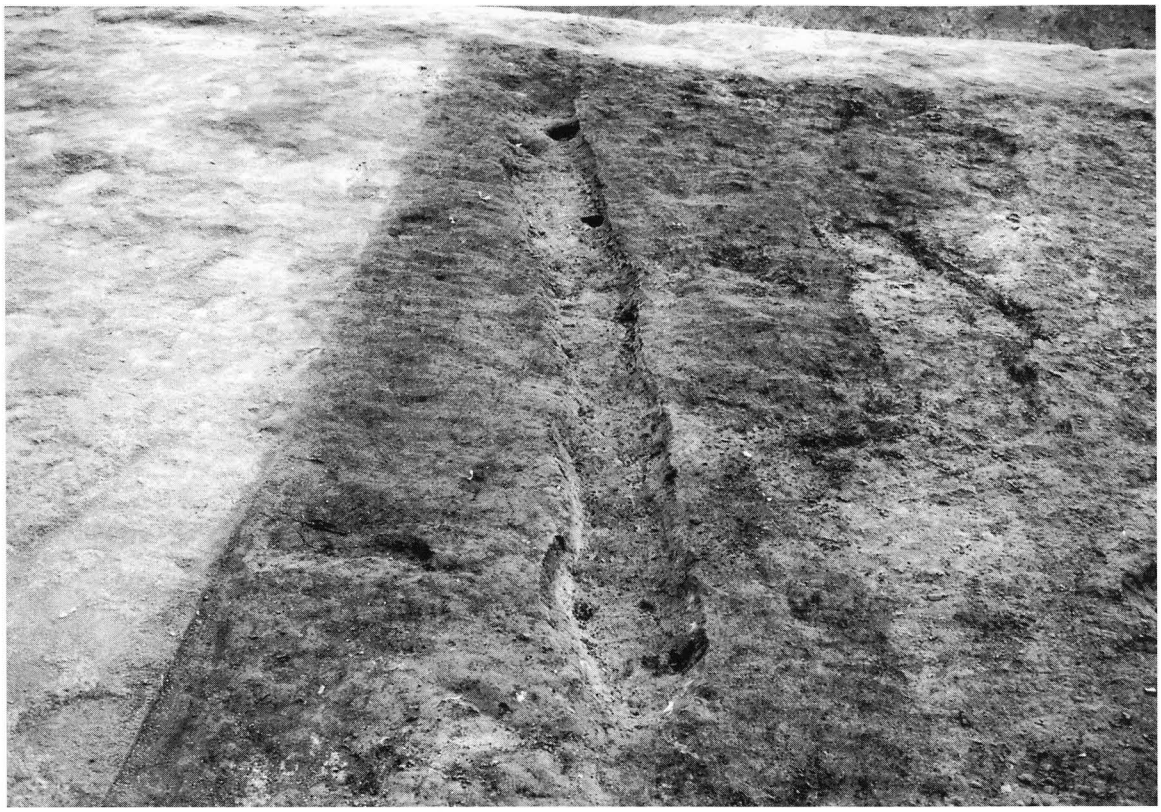
図版３－１　49号粘土採掘坑跡（東から）

図版３－２　49号粘土採掘坑跡（北から）

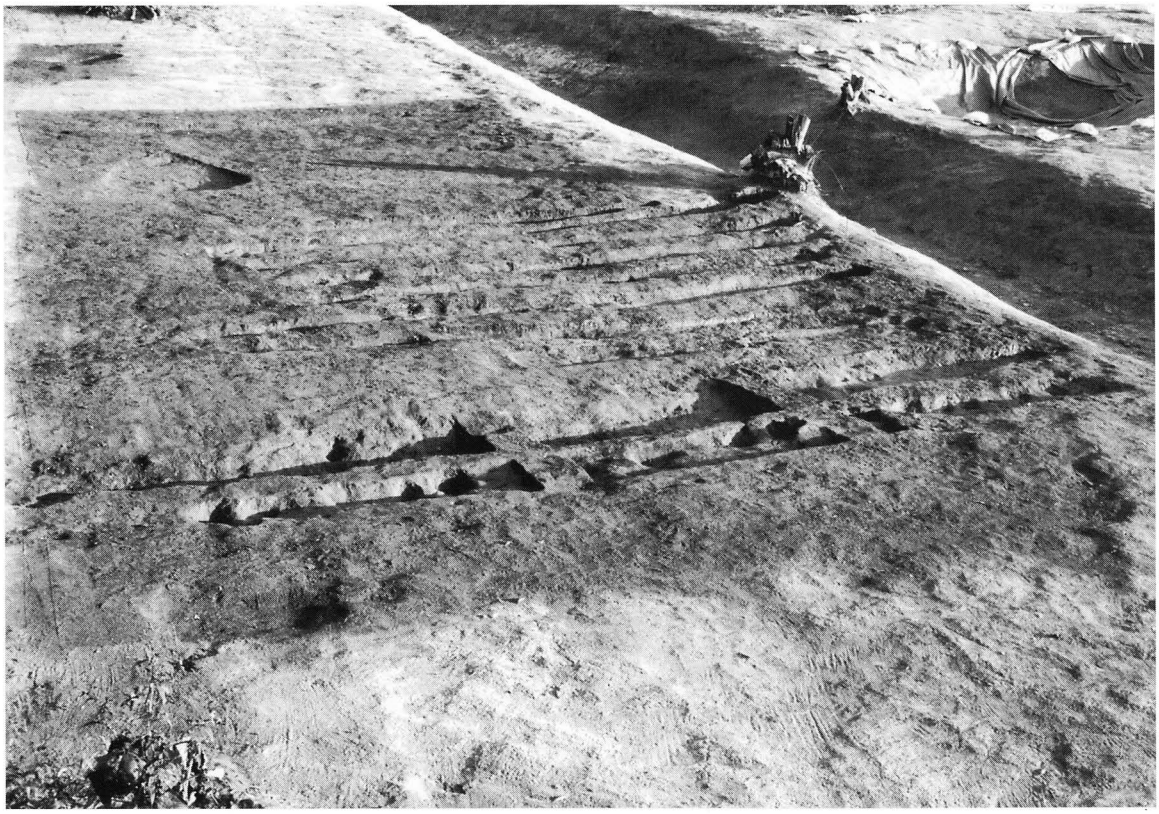
図版４－１（右上）　44号溝状遺構断面
図版４－２（右下）　44号溝状遺構断面
図版４－３（上）　　44号溝状遺構完堀状況

図版５－１　44号溝状遺構完掘状況（北東から）

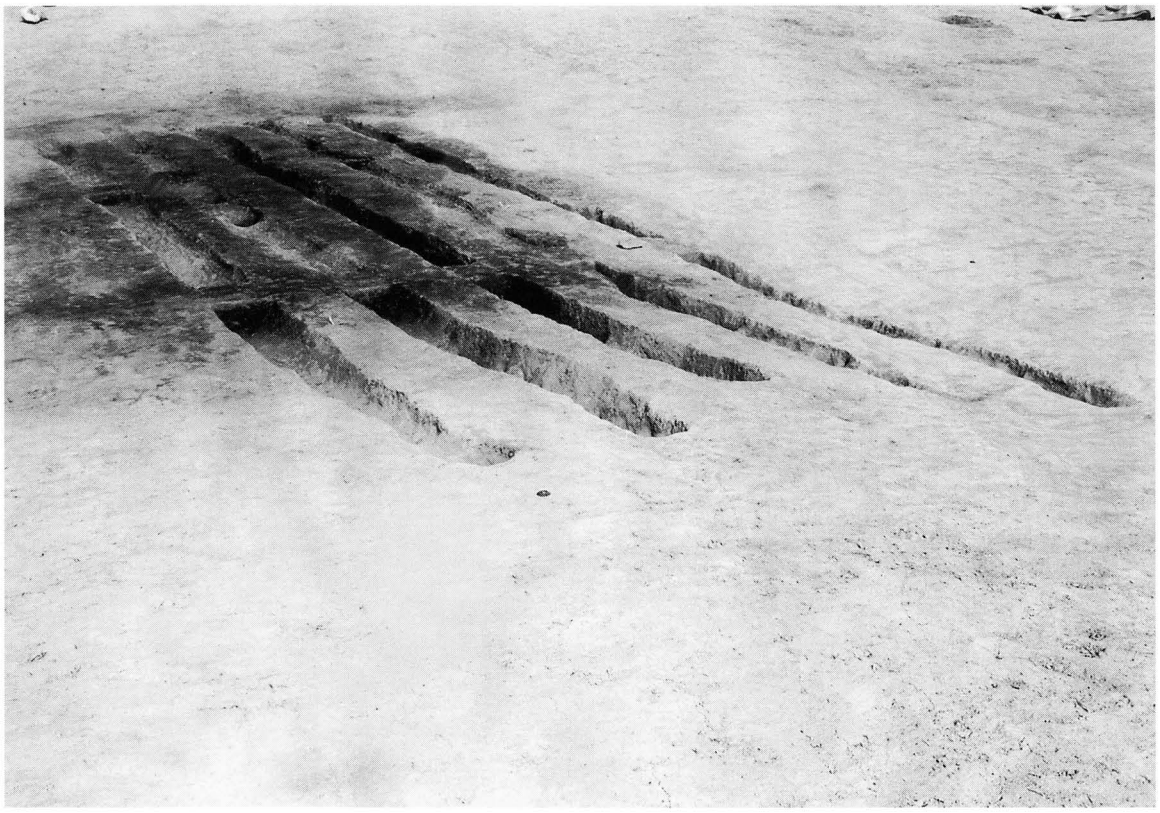
図版５－２　44号溝状遺構完掘状況（北から）



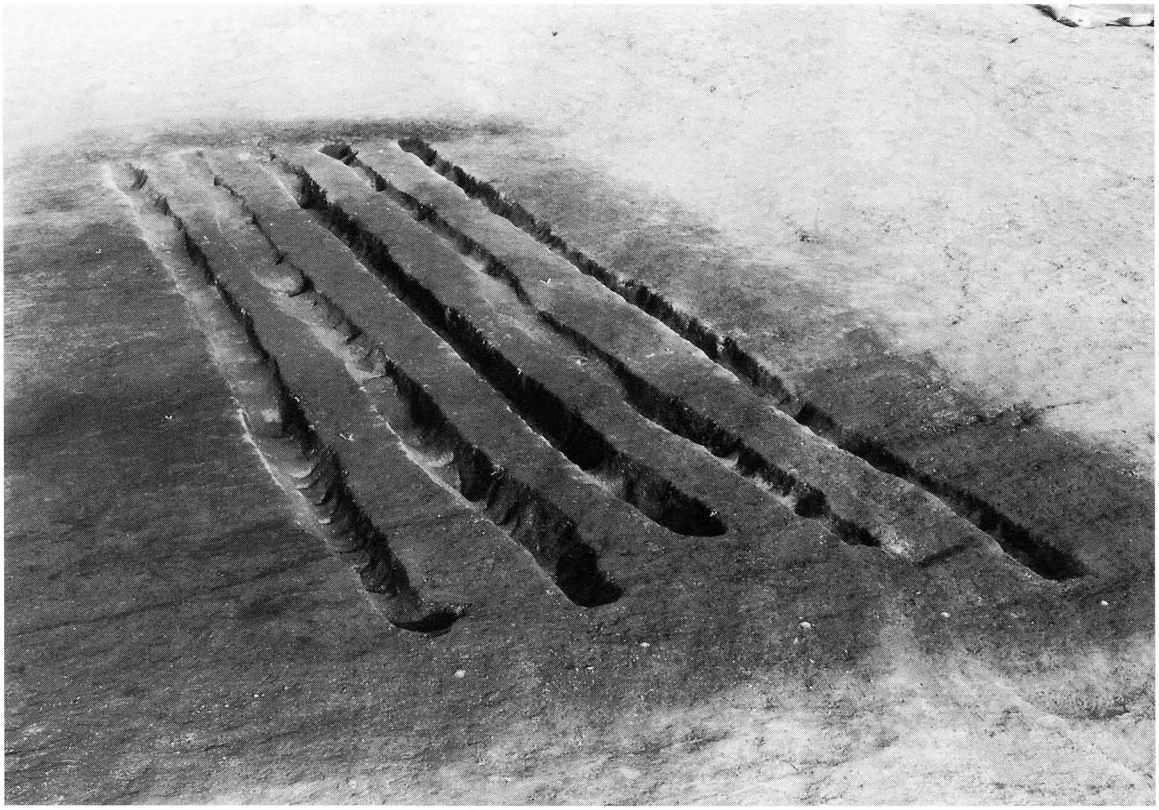
図版６－１　45号溝状遺構完掘状況



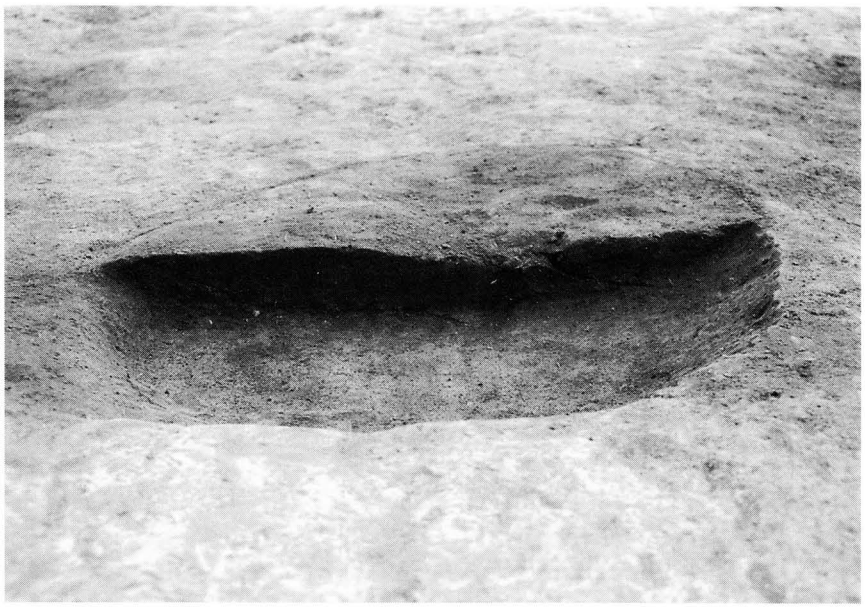
図版６－２　１号小溝状遺構完掘状況



図版７－１　２号小溝状遺構



図版７－２　２号小溝状遺構完掘状況



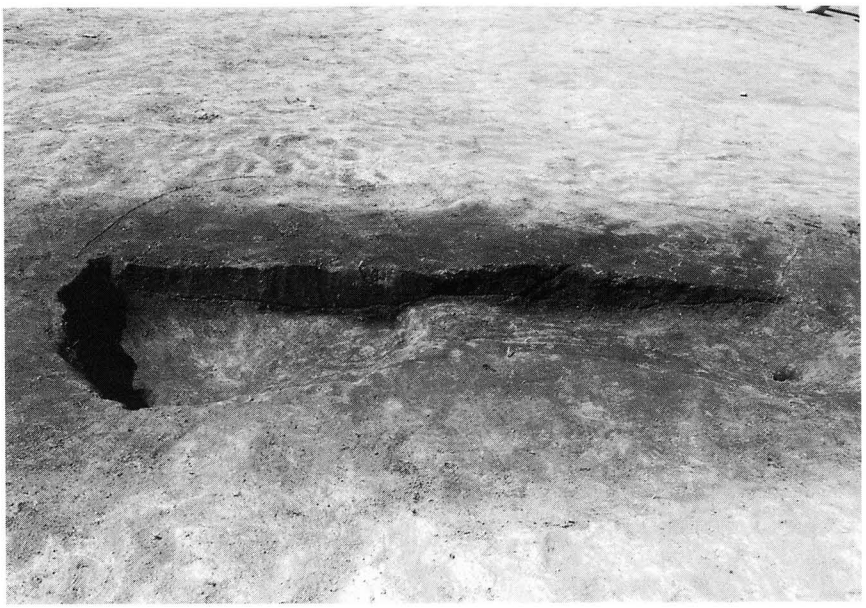
図版８－１　191号土壙断面

図版８－２　192号土壙断面

図版８－３　193号土壙完掘状況

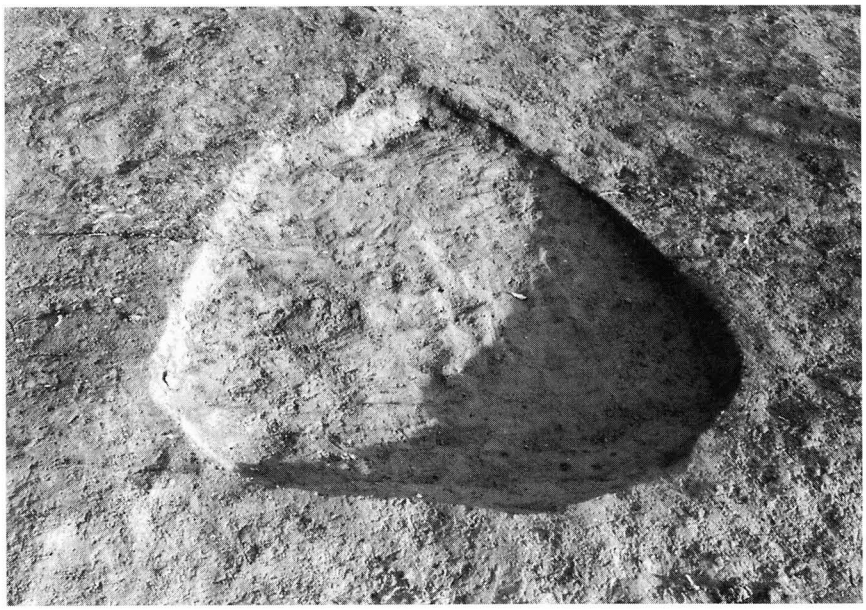
図版９－１　195号・196号・167号・198号・203号
土壙，106号焼土遺構完掘状況

図版９－２　200号土壙完掘状況

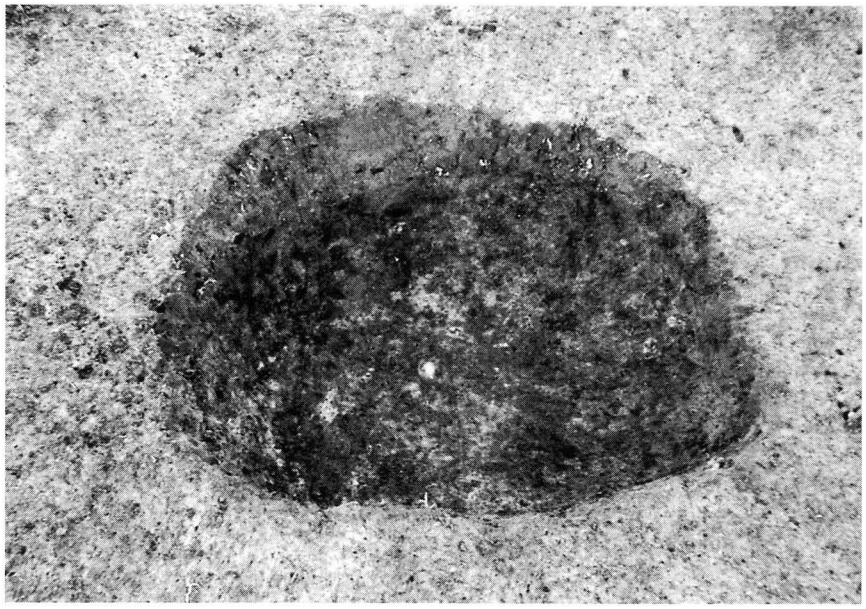


図版10－1　201号土壙断面

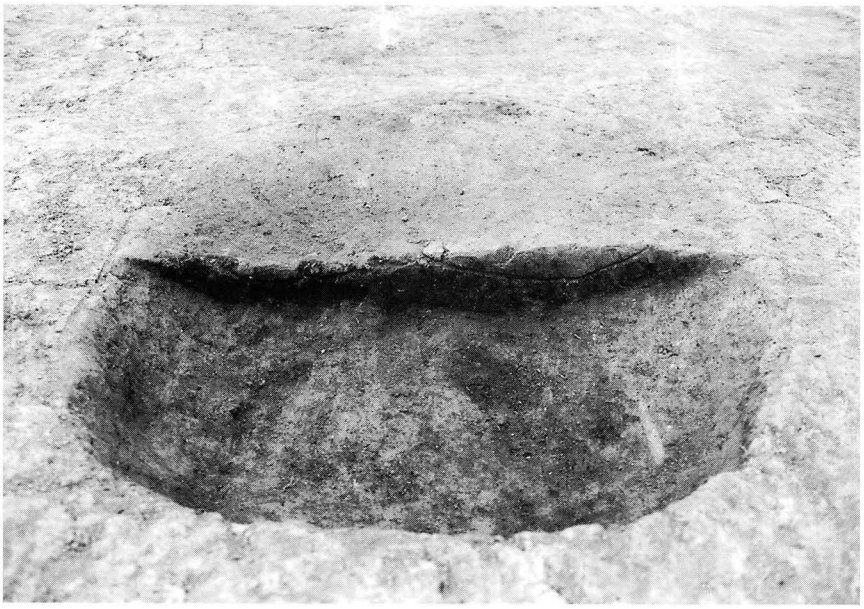
図版10－2　202号土壙完掘状況



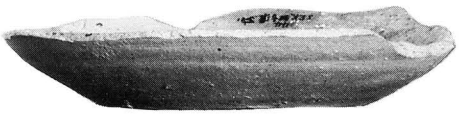
図版10－3　204号土壙完掘状況



図版11－1　105号焼土遺構完掘状況



図版11－2　107号焼土遺構断面



図版11－3　44号溝状遺構出土遺物

図版11－4　表採遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	せきのいりいせき・ちょうじゃたてあと
書名	関ノ入遺跡・長者館跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	河南町文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	中野裕平
編集機関	河南町教育委員会
所在地	宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7番地
発行年月日	平成12年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積m²	調査原因
せきのいりいせき 関ノ入遺跡 ちょうじゃたてあと 長者館跡	みやぎけんものうぐん 宮城県桃生郡 かなんちょうすえあざ 河南町須江字 せきのいり 関ノ入290番地	69 69	041 022	38° 28′ 10″	141° 15′ 25″	平成9年7月7日 ～ 平成9年12月18日	約3,900m²	石巻地方広域水道企業団による須江山浄水場配水池築造工事によって削平を受ける部分の調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
関ノ入遺跡 長者館跡	集落跡 生産遺跡 城館跡	古墳 奈良・平安	竪穴住居跡・粘土採掘坑跡・溝状遺構・小溝状遺構	土師器 須恵器	

河南町教育委員会文化財関係出版物

『わがまち河南の文化財』昭和61年11月　P．1～201

『河南町文化財調査報告書』第1集「須江糠塚遺跡」昭和62年3月　P．1～110(在庫なし)

『河南町文化財調査報告書』第2集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月　P．1～27

『河南町文化財調査報告書』第3集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月　P．1～25

『河南町文化財調査報告書』第4集「須江関ノ入遺跡－工業団地造成に伴う発掘調査概報」平成2年3月　P．1～67(在庫なし)

『河南町文化財調査報告書』第5集「御塩蔵場跡－発掘調査報告書－」平成3年3月　P．1～21(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第6集「須江窯跡群代官山遺跡」平成5年3月　P．1～108(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第7集「須江窯跡群関ノ入遺跡」平成5年3月　P．1～230

『河南町文化財調査報告書』第8集「群田遺跡」平成5年3月　P．1～72

『河南町文化財調査報告書』第9集「群田遺跡Ⅱ」平成10年3月　P．1～18

『河南町文化財調査報告書』第10集「関ノ入遺跡・長者館跡」平成12年3月　P．1～52

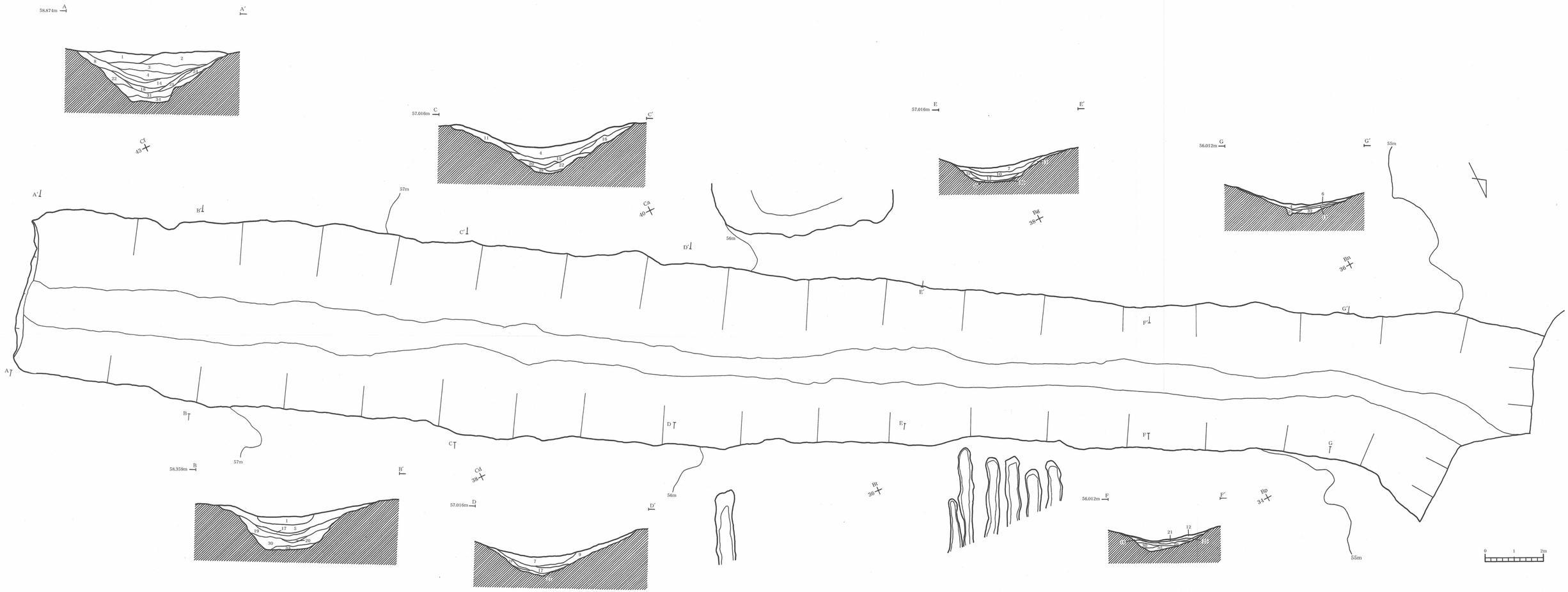
河南町文化財調査報告書　第10集

関ノ入遺跡・長者館跡

平成12年3月24日　発刊

発行　河南町教育委員会
〒987-1101
宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7
TEL 0225(72)2111

印刷　株式会社　鈴木印刷所
〒986-0861
宮城県石巻市蛇田字新谷地前121
TEL 0225(22)4101㈹


58.874m A
A′
57.016m C
C′
57.016m E
E′
56.012m G
G′
55m
57m
56m
58.359m B
B′
57.016m D
D′
56.012m F
F′
0 1 2m

第8図 44号溝状遺構